

臨檢ニ依テ證據ヲ得ヘキ充分ナル見込アル時ハ固ヨリ其處分ヲ遲疑ス可カラズ

○臨檢スルニ檢事ト書記ト同行スルノ理由

- 一 豫審處分ニハ檢事ノ立會ヲ許サスト雖モ單リ檢證處分ニ其立會ヲ要スルハ第一原告人タルノ性質ヨリシテ其檢證ノ如何ヲ認ムルノ權ナカル可カラズ此權アルハ被告人民事原告人ニ付テモ亦同シ第百六十三條ヲ參看ス可シ第二檢事ハ豫審處分ニ付キ臨時請求ヲ爲スノ權アリ此權ヲ保持スル爲メニハ亦立會ヲ爲サ、ル可カラズ第百十七條ヲ參看ス可シ然レモ豫審判事ハ一應臨檢ス可キヲ檢事ニ通知シタル以上ハ必シモ其立會ヲ待ツニ及ハス檢事モ亦自己ノ思料ニ因リ必スシモ立會ヲ爲スニ及ハサル可シ
- 二 書記ハ職務上立會人ノ性質ヲ有スルニ因リ必ス之ヲ同行セサルヲ得ス又其立會ヲ拒ムコトヲ得ス然レモ己ムヲ得サル場合ニ於テハ第

百四十八條第二項以下ノ規則ニ從フ

○臨檢スルニ使丁又ハ巡查ヲ同行スルコトヲ得ルノ理由

- 一 使丁ヲ同行スルハ臨時証人鑒定人等ヲ呼出シ又ハ差押ヘタル物件ノ運搬等ヲ命スル爲メナリ
- 二 巡查ヲ同行スルハ臨時被告人ヲ逮捕シ又ハ檢證ス可キ場所ノ取締等ヲ命スル爲メナリ

第百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ

被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

○臨檢ノ場所ニ於テ證明ス可キ方法

- 一 犯罪ノ方法ヲ證明スルハ譬ヘハ死体ヲ檢スルニ先ツ毆殺ナルヤ刃

殺ナルヤ毒殺ナルヤ其他死ニ至リタル理由ノ如何ヲ認定セサル可
カラス理由ノ如何ヲ認定スルニハ其毆殺刃殺毒殺等ヲ行フタル手
續ノ如何ヲ認定セサル可カラス蓋シ其手續ノ如何ヲ認定スルニハ
單リ有形ノ證據ノミナラス證人ノ陳述鑑定人ノ申立等ニ依リ又ハ
豫審判事ノ推測ヲ用フルヲ得

二 犯罪ノ手續ト其理由トヲ認定シタル時ハ犯罪ノ性質即チ謀殺ナル
ヤ故殺ナルヤ過失殺ナルヤヲ證明シ且其日時場所ヲモ證明スルヲ
得ヘシ

三 犯罪ノ性質方法等ヲ證明スルハ全ク附着シタルトス故ニ同一ノ
事件ニ付テハ必ス同時ニ之ヲ證明セサルヲ得ス然レモ被告人ノ人
違ナキヲ證明スルハ犯罪ノ性質方法等ヲ證明スルト相附着シル
トニ非ス故ニ同時ニ證明スルヲ得サルヲナシトセス

四 豫審處分ハ犯罪アリトシテ取調ヲ爲ス可キニ非ス唯眞實ヲ得ヘキ
爲メトシテ取調ヲ爲ス可キモノトス故ニ被告人ノ利益ト爲ル可キ
ヲチモ證明ス可キハ言ヲ埃タサルナリ即チ第一項ニ記載シタル條
件ニ付テ反對ノ證據ヲ發見シタル時ハ其取調ヲモ爲サル可カラ
ス

○臨檢調書ノ記載法

- 一 檢證ヲ爲シタル場所ヲ記載ス可シ
- 二 家宅内ニ於テ檢證ヲ爲シタルキハ戸主又ハ其同居ノ親屬若シハ戸
長ノ立會アリタルヲ記載ス可シ
- 三 被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ
- 四 被告人民事原告人及ヒ檢事ノ立會アリタルキハ其旨ヲ記載ス可シ
- 五 被告人ノ人違ナキヲ犯罪ノ性質方法日時場所ヲ證明ス可キ模様及
ヒ被告人ノ利益ト爲ル可キ模様アルキハ之ヲ記載ス可シ
- 六 差押物件目錄ヲ作りタルキハ之ヲ添ヘタル旨ヲ記載ス可シ

七 差押へタル物件ニ付キ被告人ノ辯解ヲ聽キタルキハ別ニ陳述書ヲ作リ之ヲ添へタル旨ヲ記載ス可シ

八 證人ノ陳述書及ヒ鑑定人ノ申立書アルキハ之ヲ添へタル旨ヲ記載ス可シ

九 檢證時間何時ヨリ何時マテナルヲ記載ス可シ

十 豫審判事書記及ヒ立會人ノ署署捺印アルヲ要ス

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押へテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

○臨檢ノ目的

- 一 場所ノ模様ヲ證スル
- 二 物件ヲ差押フル

○物件ノ差押

- 一 證憑タル可キ物件ニ非サレハ之ヲ差押フルヲ得ス
- 二 被告人ノ有罪無罪ノ證憑タル可キ物件ハ盡ク之ヲ差押へサル可カラス

○書類ノ差押

- 一 書類ノ秘密ハ國民ノ一大權利ナルニ因リ其差押ニ付テハ頗ル考究ス可キヲアリ郵便遞送電信ノ官署其他諸會社ニ寄託シタル書類ニ付テハ第六十九條ニ別段其法式ヲ定ム仍ホ同條ニ於テ證明ス可シ
- 二 第六十二條ノ法文ニ依ルキハ被告人ノ所持スル書類ハ言テ候ハズ外人ノ所有ニ係ル書類ト雖モ之ヲ差押フルヲ得ヘシ

三 人ノ附託ヲ受ケテ所持スル書類ニ付テハ其書類ノ性質ニ因リ頗ル困難ナルコトアリ通常ノ預リ人ナルキハ有罪又ハ無罪ノ證憑タル可キモノト思料ス可キ書類ヲ呈示セサルコトヲ得ス然レモ第百八十三條第二項ニ記載シタル者ハ其差押ヲ拒絕スルコトヲ得ルハ諸學士ノ認ムル所ナリ然レモ其職業外ノ事件ニ付テハ搜索ヲ免カル、コトヲ得ス

○差押物件ノ處置

- 一 書類其他差押ヘタル物件ハ即時ニ封印ヲ爲ス可シ若シ封印スルコト能ハサルキハ壺箱又ハ袋ニ納メ封印ス可シ
- 二 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ被告人ノ辨解ヲ聽カサルキハ他日差押物件ノ封印ヲ解キ之ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシメ其物件ハ裁判言渡アルマテ書記局ニ保存ス可シ
- 三 差押ヘタル物件不用ニ屬スルモノハ檢事ニ通知シタル上コトヲ其所

有者ニ之ヲ却付ス可シ

第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ

其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

○其日ニ處分ヲ終ラサル場合

- 一 檢證處分ハ必スシモ夜間ニ之ヲ爲スコトヲ得サルニ非ス然レモ夜間ハ間違ヲ生シ又ハ便利ヲ缺クコトナシトセズ故ニ急速ヲ要スル場合ニ非サレハ翌日ヲ待テ其處分ヲ爲ス可シ
- 二 家宅搜索ハ第百三十三條ノ末項ニ基キ夜間ニ之ヲ爲スコトヲ得ス必ス翌日ヲ待タサル可カラズ

○夜間ト雖モ家宅内ニ於テ檢證又ハ搜索ノ處分ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合

- 一 日中ヨリ處分ニ取掛リタル時
- 二 酒店娼屋等公然門戶ヲ開設シテ衆人ノ出入ヲ許シタル場所ナル時
- 三 現行犯罪アル時
- 四 戶主ノ承諾アリタル時

第百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス
第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

○搜索權ノ制限

一 被告人ノ家宅ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルコトアル可シトノ

推測ノミヲ以テ搜索ヲ爲スコトヲ得

- 二 被告人ニ非サル者ノ家宅ト雖モ物件ヲ藏匿シタルヲ推測アルキハ搜索ヲ爲スコトヲ得諸會社及ヒ公證人ノ家宅ニ付テモ亦同シ
- 三 各官署ニ屬スル家宅ハ所屬長官ニ照會シタル上ニテ搜索ヲ爲スコトヲ得
- 四 檢證ノ爲メ皇居ニ入ルハ豫メ政府ノ允許ヲ得ルコトヲ要ス外國公使館ニ付テモ亦同一ノ手續ニ依ラサル可カラス

○家宅搜索ノ立會

- 一 本條ノ第二項ハ被告人又ハ物件藏匿ノ疑ヲ受ケタル者自宅ニ居合セサル場合ナリトス然レモ是等ノ者近方ニ在ルキハ成ル可ク其立會アルコトヲ要ス
- 二 被告人近方ニ在テ其地分明ナルキハ豫メ報知ヲ爲ス可シ若シ勾留ヲ受ケ又ハ己ムヲ得サル差支アリテ立會ヲ爲スコトヲ得サルキハ次

條ニ從ヒ代人ヲ差出スヲ許ス物件藏匿ノ疑ヲ受ケタル者ニ付テモ亦同シ

三 被告人又ハ物件藏匿ノ疑ヲ受ケタル者ノ所在分明ナラス若クハ遠方ニ在テ豫メ報知ヲ爲スヲ能ハサル時又ハ報知ヲ爲シタリト雖モ立會ヲ肯セス若クハ代人ヲ差出サ、ル時ハ本條第二項ニ從ヒ同居ノ親屬又ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

○家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得サルノ解ハ第二十四條第百三十三條第百六十一條ヲ參看ス可シ

第百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

○訴訟關係人檢證處分ニ立會ヲ爲スノ權アル理由

一 被告人民事原告人ハ檢證ノ摸樣ニ因リ頗ル各自ノ利害ニ關スルヲ以テ其處分ヲ目撃シ訴訟ニ付テ用意ヲ爲サ、ル可カラズ本條ニ明文ナシト雖モ檢察官立會ノ權アルハ言ヲ俟タス民事擔當人ト雖モ立會ヲ爲スモ妨ケナカル可シ

二 訴訟關係人ヲシテ檢證處分ニ立會ハシメタルキハ其摸樣ヲ目撃シタルコ因リ疑惑ヲ生スルヲナシ又ハ後日其處分ニ付キ不服ヲ申立ルヲ難カル可シ

○訴訟關係人立會ノ手續

- 一 豫審判事檢證處分ヲ爲スルハ必ス其旨ヲ檢事及ヒ被告人ニ通知ス可シ但被告人ノ立會ヲ待ツヲ能ハサル場合ハ此限ニ在ラス
- 二 民事原告人民事擔當人ニハ別段檢證處分ヲ爲ス可キヲ通知スルニ及ハサル可シ但民事ニ關シ是等ノ者ノ立會ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

第百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六

十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

○家宅搜索ノ場合ニ於テ物件差押ヲ爲スノ手續

- 一 家宅搜索ノ目的ハ物件差押ナルヲ以テ其差押ヲ爲スヲ得ヘキハ當然ナリ本條ハ第百六十二條ノ場合ニ於テモ猶ホ其手續ハ第百六

十條ノ規則ニ同キヲ注意シタルマテニテ家宅搜索ノ場合ニ於テ物件差押ヲ爲スヲ得ヘキヲ決定メタルニハ非ス

- 二 物件差押ノ手續ノミナラス差押ヘタル物件ノ取扱ニ付テモ亦第百六十條ノ規則ニ從ハサルヲ得ス若シ急遽ノ際書記ヲ同行セサルハ何レノ場合ニ於テモ豫審判事立會人ノ立會ニ依リ自ラ物件ヲ監視シ又ハ遞送スルノ處置ヲ爲ス可シ

- 三 差押ヘタル物件ノ目錄ハ立會人中其物件ノ所有主アルルハ之ニ其謄本ヲ渡ス可シ若シ所有主ノ立會ナキハ他ノ立會人ニ渡ス可シ此規則ハ第百六十條ノ場合ニ於テモ之ヲ適用ス可シ

第百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會

タルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述

ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

○檢證處分ニ付キ被告人證人ヲ訊問スルノ手續

- 一 被告人檢證處分ニ立會ヲ爲サ、ルモハ更ニ豫審ノ訟廷ニ於テ被告
人ノ面前ニテ差押物件ヲ開封シ之ヲ指示シテ辨解ヲ爲サシム可シ
- 二 被告人檢證處分ニ立會ヲ爲シタルモハ其場所ニ於テ辨解ヲ爲サシ
メ又ハ別段豫審ノ訟廷ニ於テ辨解ヲ爲サシムルコトアル可シ
- 三 證人ヲ各別ニ訊問スルハ豫審密行ノ主義ニ背ク可カラサルヲ注
意シタルモノトス此規則ハ被告人ニ辨解ヲ爲サシムルニモ亦之ヲ

適用セサル可カラス

四 證人ヲ訊問スルニ付テハ第百七十條以下ノ規則ヲ適用ス可キヲ
定ム被告人ニ辨解ヲ爲サシムルニ付テハ第百四十九條以下ニ定メ
タル被告人訊問ノ規則ニ從ハサル可カラス

第百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何

人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁ス
ルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ル
マテ之ヲ留置スルコトヲ得

○檢證ノ場所ニ外人ノ出入ヲ禁スルノ處分

- 一 檢證ノ場所ハ訟廷ト假定スルコトヲ得ヘシ其出入ヲ禁スルハ見證人
ヲシテ散亂セシメサルト衆人ヲシテ取調ヲ妨碍セシメサルトニ在

リ即チ第二百七十二條ニ於テ裁判長ニ附與シタル權ト同視ス可キ
モノトス

二 犯禁者ノ處分ハ之ヲ逐斥シ又ハ一時之ヲ拘留場若クハ其他ノ場所
ニ留置スルマテニ別ニ刑ヲ言渡スヲ得ス佛國治罪法第三十四
條ノ規則ト同シカラス

第百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ

臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

○職務ノ囑託

一 囑託スルヲ得ヘク又ハ囑託スルヲ得ヘカラサル職務

一 訊問檢證其他事實ヲ證明スルマテノ處分ハ之ヲ囑託スルヲ得

二 命令及ヒ言渡ノ如キ裁判官自己ノ決定ヲ取ル可キ眞ノ裁判權

内ニ屬スル處分ハ猥リニ之ヲ囑託ス可カラス

二 囑託ス可キ官吏

一 捜査ノ處分ニ付テハ其幾部ヲ司法警察官ニ囑託スルヲ得然
レモ檢事ニ囑託スルヲ得ス

二 豫審ノ處分ニ付テハ其一部ヲ治安判事又ハ他管ノ豫審判事治
安判事ニ囑託スルヲ得

三 囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ更ニ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ
得

三 囑託ス可キ場合

一 官吏ノ職權ハ管轄地外ニ及ハサルノ原則ニ依リ他ノ管轄地内
ニ於テ取調ヲ要スルキハ必ス其地ノ管轄官吏ニ囑託ノ事件ヲ
明示シテ其處分ヲ求ム可シ

二 管轄地内ニ於テ囑託ス可キ場合ハ裁判所外ニテ取調ヲ爲ス可

キ事件ニ限ル第一判事差支ノ爲メ第二費用省減ノ爲メナリト
ス

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトス
ル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被
告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ
對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得
但受取證書ヲ渡ス可シ
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ
還付ス可シ

○書類ヲ開披スルノ理由

一 書類ノ秘密ハ家宅不侵ノ權利ト並立ス可キモノニシテ之ヲ開披ス
ルニ付テハ最モ鄭重ヲ加ヘサル可カラズ蓋シ書類ヲ開披スルハ秘

密ヲ評クノ旨趣ニ非ス證據ヲ差押フルノ處分ナリトス

二 搜索權ノ書類ニ及フ可キハ第六十條第六十四條ニ於テ之ヲ
許シタリ然レモ本條ハ其旨趣ヲ擴張シテ搜索權ハ公然郵信ノ取扱
ヲ以テ職トスル官署若クハ會社ニモ及フ可キヲ定メタルモノト
ス蓋シ假令官署又ハ會社ノ保護物件ト雖モ公益ニ悖戻ス可キ特權
ヲ有スルモノニ非ス

○差押ヲ爲スヲ得ヘキ書類

一 被告人ヨリ外人ニ對シ發シタル書類又ハ外人ヨリ被告人ニ對シ發
シタル書類ヲ差押フルニハ別段困難アルヲナシ何トナレハ既ニ被
告人ノ氏名アルハ之ヲ差押フルヲ得ヘキモノタルノ推測アリト
ス
二 豫審ニ關係アル者ヨリ外人ニ對シ發シタル書類又ハ外人ヨリ豫審
ニ關係アル者ニ對シ發シタル書類ニ付テハ頗ル注意セサル可カラ

本條豫審ニ關係アル者トアレト如何ナル者ヲ以テ豫審ニ關係アル者トスルヲ定メス蓋シ被告事件ノ正犯從犯及ヒ附帶ノ犯罪ヲ以テ可キ嫌疑アル者ヲ包含シタルモノトス其嫌疑アル者トスルニハ之ヲ認ム可キ充分ナル推測アルヲ要ス

三 被告人又ハ豫審ニ關係アル者偽名又ハ暗號ノ書類電報ヲ用ヒタリト雖モ之ヲ用ヒタル充分ノ推測アルキハ亦差押ノ處分ヲ爲ス可キ得

○書類電報其他物件差押ノ手續

一 豫審判事ハ嫌疑アル事由ヲ官署又ハ會社ニ通知シ書類又ハ其他ノ物件ヲ受取り檢事ノ立會ニ依リ調書ヲ作ル可シ但其調書ニハ證據ト爲ル可キモノ外書類ノ文意ヲ寫取ル可カラズ是等ノ處分ハ成ル可ク書類物件ヲ受取ル可キ者若クハ之ヲ發シタル者ノ立會ニ依リ之ヲ爲シ且第百六十五條ニ從ヒ被告人ニ示シテ辨解ヲ爲サシム可シ

二 如何ナル場合ニ於テモ開披シタル書類物件ハ取調ノ上ニテ即時ニ封印ス可シ若シ其書類物件留置ク可キモノニ非ズ又ハ一旦留置キタル後不用ニ屬シタルキハ檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ官署又ハ會社ニ還付シ若クハ其差出人又ハ受取人ニ交付シ其旨ヲ官署又ハ會社ニ通知ス可シ

第六節 證人訊問

○證人訊問ノ解

一 證ニ三種アリ第一證據第二徵憑第三事實參考ノ事物蓋シ證ノ輕重厚薄ニ因テ之ヲ名ク證人ニ二種アリ第一宣誓ス可キ者第二宣誓ス可カラサル者蓋シ證人ノ身分及ヒ其能力ノ強弱ニ因テ之ヲ定ム故ニ宣誓スルト否トハ證人タル効力ニ輕重厚薄アリト雖モ其證ノ輕

重厚薄アルニ非サルナリ

二 證ノ輕重厚薄ト證人タル効力ノ輕重厚薄ハ裁判官ノ心證ニ供スル表面ノ輕重厚薄ニシテ必スシモ其心證ヲ惹起スルニ付テ輕重厚薄アルニ非サルナリ

三 犯罪前後ノ模様被告人被害者平素ノ品行又ハ犯罪ヲ目撃シタル者アル時ハ其模様ヲ詳悉スルハ証人ナルヲ以テ其証ヲ聽クヤ最モ易シ其証ヲ得ルヤ最モ益アルモノトス

四 鑑定人通事等ニ比スレハ証人コ對スル處分ハ頗ル嚴ナルモノアリ蓋シ鑑定人通事タル可キ者ノ如キハ必スシモ其人ニ限ラス然レモ証人クル可キ者ノ如キハ其人ヲ棄テ他ニ求ム可キ者ナシ即チ証人ナケレハ犯人ナシト謂フモ可ナリ故ニ社會ニ對スル証人ノ義務ハ鑑定人通事等ヨリモ頗ル重大ナリトス

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ

證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限り先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限

ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヲ得

○證人タル可キ者ヲ定ムル方法

一 豫審ニ於テハ公判ノ如ク證人ヲ差出スノ法式アルヲナシ然レモ檢事其他訴訟關係人ヨリ書類又ハ口述ヲ以テ何某ハ云々ノ證人タリ

トノ申立アリタルハ之ヲ聽カサル可カラズ

- 二 豫審ノ證人ハ公判ノ證人ノ如ク必スシモ檢事其他訴訟關係人ヨリ差出スヲ待テ之ヲ訊問スルニ非ス何トナシハ被告人ノ逮捕ヲ待テスシテ豫審ニ着手シ又ハ檢事ノ請求ヲ待タスシテ被告事件ヲ受理スルコアリ故ニ其職權ヲ以テ何時ニテモ原被ノ證人タル可キ者ヲ訊問スルコヲ得

○呼出ス可キ證人ノ員數ヲ定ムルノ事由

- 一 本條第二項ハ證人タル可キ員數ノ制限ニ非スシテ呼出ノ費用ト手數トノ制限ナリトス立法官ノ主義ハ但書ヲ以テ分明ナル可シ
- 二 本條第二項ノ規則ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ指名シタル證人ノミニ限ラサル可シ畢竟費用ト手數トノ制限ハ豫審判事ノ職權ヲ以テ呼出ス可キ證人ニ付テモ亦之ヲ遵守セサルヲ得ス且證人ヲ呼出スニ指名ノ順序ニ從フハ最モ事實ヲ知リタル者ヲ推測スルコト能ハサル

ル場合ニ限ル何トナシハ証憑ヲ集取スルノ處分ニ付テハ豫審判事訴訟關係人ノ申立ニ拘束セラル、コトナカル可シ

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可

シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可

シ若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第百七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記

載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡

シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ア

ル可シ

○證人呼出狀ノ記載法

一 法律ニ明文ナシト雖モ證人トシテ呼出ス可キ事件ヲ

記載セサル可カラズ蓋シ何等ノ爲メ呼出ヲ受クルカ又ハ何等ノ事

件ニ付テ訊問ヲ受クルカチ知ラシメサルハ頗ル壓制ノ方法タルノ

ミナラス證人ハ其豫備ヲ爲サルニ因リ訊問スルニ當リ前後狼狽

シテ錯誤脱漏ノ陳述ヲ爲スコト免カレサル可シ

二 證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載セサル可カラズ蓋シ被告人ニ對ス

ル令狀ニハ氏名等分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可キコトヲ

記載セリ至ク急遽ノ際其氏名等ヲ探知スルニ暇ナキ場合ヲ慮リタル

モノトス然レモ召喚狀ヲ受ク可キ被告人及ヒ呼出狀ヲ受ク可キ證

人ノ如キハ其氏名住所職業ヲ聞合セタル上ニテ出廷セシムルハ妨

ケナカル可シ故ニ氏名住所ノ記載ナキ呼出狀ハ無効タル可シ然レ

モ職業ノ記載ナキハ同一ノ町村ニ同一ノ氏名アル場合ニ非サ

レハ其呼出狀ヲ無効トス可カラズ若シ氏名住所職業盡ク同一ナル

者アルモハ番地又ハ年齢等特ニ其本人ニ限ル可キ記載アルコト非サ

レハ氏名住所職業ヲ記載シタル呼出狀ト雖モ無効タルコトアル可シ

三 呼出ニ應セサルニ付テノ制裁ヲ記載セサル可カラス蓋シ其制裁トハ第百七十六條第一項ニ定メタル二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡シ及ヒ同條第二項ニ從ヒ勾引狀ヲ發スルコトニシテ之ヲ記載スルハ豫メ証人タル可キ者ヲシテ裁判官ノ命令ニ違反セシメサル爲メノ注意ナリトス

四 呼出狀ハ召喚狀ト同シク豫審判事ヨリ發スルヲ以テ第百三十條第二項ニ從ヒ豫審判事及ヒ書記ノ署名捺印アルヲ要ス但第百七十一條ニ特ニ豫審判事ノ名ヲ以テ証人ヲ呼出ス可キコトヲ定メタルハ畢竟証人ハ之ヲ差出ス可キ原告又ハ被告ヨリ呼出ス可キモノト雖モ豫審ニ於テハ証憑集取ノ時機ヲ失ハサル爲メ原告又ハ被告ヨリ指名シタルト否トニ拘ハラヌ總テ豫審判事ヨリ之ヲ呼出ス可キナリ

五 送達ヲ爲スニ付キ記載ス可キコトハ第百二十三條ノ規則ニ同シ但呼出狀ハ二通ヲ作り別ニ送達書ヲ添ルニ及ハス

○呼出狀ノ送達

一 第百七十一條ニ呼出狀ヲ送達スルハ第百二十三條ノ規則ニ從フ可キコトヲ定ム而シテ第百二十二條ノ規則ニ從フ可キコトヲ脱漏シタリ何トナレハ第百二十三條ニハ送達人トノミアリテ送達人ノ何者タルヤヲ知ル可カラヌ且第百二十二條ノ規則ニモ從フ可キコトヲ定ムルハ別段第二項ヲ掲載スルニ及ハサル可シ

二 第百七十一條第二項ハ第百二十二條第二項ノ規則ト異ナルコトナシ然レモ本條ニ送達ノ事ヲ囑託スルハ輕罪裁判所書記ニ限リタルハ實際甚ク不便ヲ免カレヌ蓋シ証人訊問ノ事ト雖モ直ニ管轄地外ノ治安判事ニ囑託スルコトヲ得ルヲ以テ豈ニ証人呼出狀送達ノ事ヲ治安裁判所書記ニ囑託スルコトヲ得サルノ理アラシヤ且第百二十二條ニハ其地ノ裁判所書記トシテ記載セリ頗ル輕罪裁判所書記ニ限リタルノ穩當ナラサルヲ覺フ

○訊問ノ囑託

- 一 豫審判事其管轄地内ノ治安判事ニ囑託ヲ爲スコトヲ得ルハ當然ナリ
ト雖モ平常治安判事ノ行フコトヲ得サル職務ナルヲ以テ第六十一條ノ規則アルニ拘ハラス別段囑託スルヲ得ヘキコトヲ定メタルモノトス
- 二 管轄豫審判事ヨリ管轄ニ非サル豫審判事ニ囑託シ其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ更ニ管轄地内ノ治安判事ニ囑託スルコトヲ得ルハ當然ニシテ第七十二條第二項ニ又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得トアルハ管轄豫審判事ヨリ直ニ其管轄地外ノ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタルモノトス
- 三 訊問ノ事ヲ囑託スルニ付テハ訊問ヲ爲シ得ヘキ爲メ必要ナル處分ハ總テ之ヲ囑託シタルモノト看做サハルヲ得ス故ニ囑託ヲ受ケタル判事ハ自己ノ名ヲ以テ呼出狀ヲ發スル而已ナラス証人正當ノ事故アリテ呼出ニ應スルコト能ハサルハ其所在ニ就テ訊問シ又正當

ノ事故ナクシテ呼出ニ應セサルハ罰金ヲ旨渡シ勾引狀ヲ發スル等ノ處分ヲモ爲スコトヲ得ヘシ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出

- ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬

ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上己ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

○呼出ヲ受ケタル證人ノ疾病事故

- 一 第七十四條ハ第七十五條ト異ナルコトナシ若シ本人管轄地外ニ

在ルキハ第百二十五條ハ第百十九條ノ例ニ從ヒ其所在ノ地ノ豫審
判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可キヲ定ム然レモ第百七十四條ハ第百
七十二條ノ例ニ從ヒ所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ囑託スル
ヲ得ルハ當然ナリ

二 第百七十五條ハ第百三十六條ト異ナルヲナシ其在艦又ハ行軍ノ際
モ亦同一ノ手續ニ從フ可キハ當然ナリ

三 常人ト軍人軍属トヲ問ハズ被告人ノ疾病事故アル場合ト証人ノ疾
病事故アル場合トノ處分ハ別段差異アルヲナシテ其解釋ハ第
百二十五條第百三十六條ニ讓ル然レモ被告人ト証人トハ身位ノ關
係差異アルニ因リ寬嚴ノ處置少シク斟酌セサル可カラズ

第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合

ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ

二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シ
テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼
出狀ヲ送達シ又ハ直テニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費
用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡
シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ
受ケサルヲ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヲ
又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシ
ヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ

取消ス可シ

○呼出ニ應セサル證人ヲ處分ス可キ特例

- 一 豫審判事ニテ刑ノ言渡ヲ爲スル蓋シ此特例ハ證人ヲシテ出頭セシムル爲メ其處分ノ急速ナルヲ要スル爲メナリ
- 二 本人ヲ呼出サズ其他訴訟ノ法式ヲ用ヒスシテ裁判ヲ爲スル蓋シ此特例ハ處分ノ急速ヲ要スルト出頭セサルノ明白ナルトニ依ル
- 三 故障及ヒ控訴ヲ許サ、ルヲ蓋シ此特例ハ第二百七十四條公廷内ノ犯罪ニ付キ控訴ヲ許サ、ル場合ト同視スルヲ得ヘシ豫審判事ノ言渡ナルヲ以テ豫審ニ屬スル處分ト看做ス時ハ故障ヲ爲シ刑ノ言渡ナルヲ以テ公判ニ屬スル處分ト看做ス時ハ控訴ヲ爲スヲ得ヘシ然レモ出頭セサルノ明白ナルニ因リ訴訟ノ法式ヲモ用ヒスシテ裁判ヲ爲スヲ許セリ豈ニ故障控訴ヲ以テ更ニ事實ノ覆審ヲ要スルノ理アラナヤ

- 四 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發スルヲ蓋シ此特例ハ罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對スルノ處分ニ非スシテ呼出ニ應セサル證人ヲシテ出頭セシムル爲メノ處分ナリトス
- 五 証人呼出ニ應セサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ其罰金ノ言渡ヲ取消スル蓋シ此特例ハ闕席裁判ニ對スル故障ト同視スルヲ得ヘシ畢竟本人ヲ呼出サスシテ直ニ裁判言渡ヲ爲スコ因リ本人ハ何等ノ辨護ヲモ爲スル能ハサル可シ故ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ申立テタルハ罰金ノミナラス呼出ノ費用ヲ擔當ス可キノ言渡ヲモ取消ス可キハ當然ナリ其取消ノ言渡ニ付テモ亦故障控訴ヲ許サ、ル可シ
- 六 証人呼出ニ應セサルニ付キ定メタル罰金ノ刑ヲ適用スルハ刑法ニ定メタル再犯及ヒ數罪俱發ノ例ニ依ラサルヲ蓋シ此特例ハ初度ノ呼出ニ應セサル罰金ノ言渡ニ付テノ上告期限内ト雖モ急速ナル處

分ニ付キ証人ノ出頭ヲ促ス可キ効力ヲ附與シタルモノトス又初度ノ呼出ニ應セサル罰金ノ言渡確定シタル後ト雖モ二倍ノ罰金ニ處スルヲ以テ再犯ノ例ニ依ラサルヲ推知ス可シ然レモ判然タル法文ナキヲ以テ或ハ疑惑ヲ生スルヲ無シトセス

○再度ノ呼出狀又ハ勾引狀ヲ發スルノ手續

一 再度ノ呼出狀ニハ若シ其呼出ニ應セサル時ハ四圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發ス可キヲ記載シ初度ノ呼出ニ應セサルニ付テハ罰金及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ擔當ス可キノ言渡書ト共ニ之ヲ送達セシム

二 再度ノ呼出狀ヲ發セズシテ直ニ勾引狀ヲ發スルキハ必スシモ勾引狀ト同時ニ初度ノ呼出ニ應セサル刑ノ言渡書ヲ送達スルコト及ハス被告人ノ出頭ヲ待テ第七十六條第一項ノ處分ヲ爲ス可シ

三 再度ノ呼出ニ應セサル時モ初度ノ呼出ニ應セサル時ト其手續ニ差

異アルヲナシ然レモ再度ノ呼出ニ應セサル時ハ其証人ノ供述ヲ聽クヲ要セサルニ至リシ場合ニ非サレハ必ス勾引狀ヲ發ス可シ法律上再度ノ呼出ニ應セサル以上ハ呼出ニ應スルノ念ナキ者ト推測スルニ因リ更ニ呼出狀ヲ發スルヲナカル可シ故ニ三度ノ呼出狀ニ應セサル者ヲ罰スルノ明文ヲ見ス

四 証人呼出ニ應スルヲ能ハカリシ正當ノ事由ヲ證明スルハ其期限ヲ定メサルヲ以テ何時ニテモ其申立ヲ爲スヲ得ヘシ然レモ上告ノ期限ヲ經過シタルキハ之ヲ爲スヲ得サルハ言ヲ候タス但上告ノ期限ハ再度ノ呼出狀又ハ勾引狀ト共ニ罰金ノ言渡書ヲ送達シタルキハ其送達シタルヨリ之ヲ起算シ証人ノ出廷ヲ待テ罰金ヲ言渡シタルキハ其言渡アリタルヨリ之ヲ起算ス

第七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出

狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違
ナキコトヲ證明ス可シ

第百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對
シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル
者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正
實ニ陳述ヲ爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシ
ム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

○出廷シタル證人陳述前ノ手續

- 一 出廷シタル證人ハ管テ送達人ヨリ受取リタル呼出狀ヲ書記ニ差出シ
其人違ナキコトヲ証ス可シ其人違ナキコトヲ証スルハ別段鄭重ナル方
法ヲ要スルニ非ス畢竟第百七十八條ノ法式ハ唯云々事件ノ證人ト
シテ出廷シタルコトヲ証スルニ過キス何トナレハ證人ノ氏名ヲ詐稱
シテ出廷スル者ハ證人ト通謀シタル者ナル可シ證人ト通謀シタル
詐僞ノ術數ハ到底其呼出狀ヲ携帶セシムルヲ以テ之ヲ防クコト能ハ
サル可シ故ニ呼出狀ヲ遺失シタル時ハ戸長ノ証書ヲ差出シ若シ即
時ニ戸長ノ証書ヲ差出スコト能ハサル時ハ豫テ印刷シタル自己ノ名
刺又ハ署名捺印シタル自己ノ証書ヲ差出ス等ノ方法ヲ以テ容易ニ
人違ナキコトヲ証スルヲ許ス可シ
- 二 証人呼出狀ヲ差出シ又ハ呼出狀ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ
証明シタル上ニテ豫審判事ハ證人宣誓前其身上ニ付テ問ヲ爲ス可シ
 - 一 第百七十九條ニ從ヒ氏名年齢職業住所ヲ問フハ云々事件ノ證人ヲ

ルコトヲ認ムル爲メ而已ニシテ訊問上ノ体裁ニ關スル一箇ノ法式タルニ過キス唯其年齡ニ付テハ第八十二條第一ニ記載シタル者タルヤ否ヲ知ルニ必要ナリトス

二 第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フハ最モ必要ナル可シ何トナシハ豫審ニ於テハ別段訊問ス可キ証人ノ氏名ヲ原告及ヒ被告ニ通知スルニ及ハス故ニ原告又ハ被告ヨリ証人ニ付テ異議ヲ述フルニ由ナシ且法律ヲ知ラサル者ハ此問ナケレハ自ラ宣誓スルコト得ヘキ者ナルヤ否ヲ知ラサルコトモ有ル可シ

三 第八十二條第一ニ記載シタル者ハ既ニ年齡ヲ問フテ以テ分明ナル可シ第二第三ニ記載シタル者ハ問ハサルモ之ヲ知ルコト得ヘキ又之ヲ問フノ益ナシ然レモ第四第五第六ニ記載シタル者ニ付テハ之ヲ問ハサル可カラス或ハ証人ヲ辱シムル所以ナルニ因リ之ヲ問フ可カラサルノ説アリ然レモ被告人ノ親屬ナリヤ否ヲ問フモ亦問

接ニ証人ヲ辱シムル所以ナラスヤ是等ノ問ハ單ニ訊問上ノ法式ト看做ス可キヲ以テ何ソ耻辱トスルコ足ラン且別ニ是等ノ者タルコトヲ証スルノ方法ナキニ因リ之ヲ問フハ却テ必要ナル可シ

四 第七十九條ニ記載シタル問ハ被告事件ニ關セス唯宣誓ス可キ者ナルヤ否ヲ認ムルニ必要ナル手續ニ付キ宣誓前之ヲ爲サ、ル可カラス故ニ其答ニ詐僞アリト雖モ僞証ヲ以テ之ヲ罰ス可キニ非ス其氏名等ヲ詐稱スルカ如キハ刑法第二百三十一條ニ明文アリ

三 証人ノ身上ニ付テノ問ヲ終リタル上ニテ豫審判事ハ証人其名譽ト本心トニ對シ愛憎畏懼ノ心ナシ正實ニ陳述ス可キノ誓詞ヲ讀聞カセ宣誓書ニ署名捺印セシム

○宣誓ノ式

一 各國宣誓ノ式ヲ用ヒサル無シ而シテ宣誓ノ主義タル總テ宗教ニ基ク然レモ我邦宣誓ノ主義ハ宗教ニ基クモノニ非ス唯其名譽ト本心

トコ背カス公平正直ナル人タルニ耻サルコトヲ公言スルモノトス故
ニ國ノ内外ト宗教ノ異同ニ拘ハラヌ何人コモ之ヲ適用スルコトヲ得
ヘシ

二 各國宣誓ノ式ヲ行フニ或ハ手ヲ舉ケ或ハ經交ヲ吮ル等宗教ノ慣例

一ナラヌ然ルニ我邦宣誓ノ式ハ通常ノ証書ニ倣ヒ宣誓書ニ署名捺
印セシメ其信憑ヲ保存ス

三 宣誓ノ式ハ必スシモ陳述ノ信偽ヲ表スルニ足レリト謂フ可カラヌ
然レモ宣誓ノ式ヲ行フタル以上被告人ヲ曲庇又ハ陷害スル爲メ詐
偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ偽証律ニ依テ罰セラル、コト有ル可シ故ニ
偽誓ノ容易ナルヲ以テ容易ニ偽証ヲ述フルコトヲ得サル可シ且訊問
ノ式鄭重ナルコトハ証人ノ意ヲ用フルコトモ亦隨テ鄭重ナル可シ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サ
ス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見
ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ

重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

○證人タルコトヲ許サ、ル者

一 身上ニ付テ證人タル可カラサル者但第百八十一條ニ記載シタル者及ヒ第百八十二條第六ニ記載シタル者はナリ

二 無能力ニ付テ證人タル可カラサル者但第百八十二條第一ヨリ第五マテニ記載シタル者はナリ

○身上ニ付テ證人タル可カラサル者ト無能力ニ付テ證人タル可カラサル者トノ差異

一 身上ニ付テ證人タル可カラサル者ハ其身上ニ關スル事件ノミニ付

テ證人タルコトヲ得ニ他ノ事件ニ付テハ毫モ證人タルノ効力ヲ減スルコト無シ

二 無能力ニ付テ證人タル可カラサル者ハ單リ其事件ノミナラス他ノ事件ニ付テモ亦證人タルノ効力ヲ有スルコト無シ

○證人タル可キヤ否ヲ定ムルノ方法

一 豫審ニ於テハ豫審判事ノ判定ニ任ス

二 公判ニ於テハ證人タル可キ者ナルヤ否ハ裁判官ノ判定ニ任スト雖モ訴訟關係人ノ異議ノ有無ニ因テ之ヲ定ムルノ方法一ナラス次ノ解釋ヲ參看ス可シ

○身上ニ付テ證人タルコトヲ許サ、ルノ理由

一 第一自己ノ所爲ニ付テ證人タルコトヲ得サル而已ナラス訴訟ニ付テ直接ニ利害ノ關係アル者ハ法律ニ明文ナキ者ト雖モ證人タルコトヲ

得サル可シ故ニ被告人民事原告人ハ言テ峻ク民事擔當人及ヒ犯罪ヲ告發スルニ付キ賞金ヲ受ク可キ者モ亦証人タルコトヲ得サル可シ畢竟訴訟上利害ノ關係アル者ハ各自平等ナル辨論ノ權ヲ有セサル可カラズ譬ヘハ民事原告人ヨリ被告人ニ對シ予ハ汝カ予ノ金圓ヲ詐取シタル証人ナリ之レヲ償フ可シト云フコトヲ得ルキハ被告人ハ民事原告人ニ對シ予ハ予ノ汝カ金圓ヲ詐取セサルノ証人ナリ之ヲ償フニ及ハスト云フコトヲ得ヘシ然レモ民事原告人ト爲ラサル被害者ハ其訴訟ニ付テ直接ニ利害ノ關係ヲ有セサルニ因リ証人タルヲ得ヘシ第二民事原告人ノ親屬其他第百八十一條第三第四ニ記載シタル者ハ被告人ノ親屬等ニ証人タルコトヲ許サ、ルト同一ノ主義ニ非ス何トナレハ民事原告人ノ爲メ容隠ヲ許ス爲メニ非スシテ嫌疑ノ爲メ証人タルノ効力ヲ失ハシメタルモノトス畢竟民事原告人被告人共ニ其親屬等ニ証人タルコトヲ許サスト雖モ何レノ場合ニ於

- テモ民事原告人ノ利益ニ非スシテ被告人ノ利益ナル可シ故ニ民事原告人ノ親屬等ハ被告人ノ承諾アル時ハ正當ノ証人タルコトヲ得然レモ被告人ノ親屬等ハ民事原告人及ヒ檢事ノ承諾アリト雖モ正當ノ証人タルコトヲ得サル可シ
- 二 被告人ノ親屬其他第百八十一條第三第四ニ記載シタル者ニ証人タルコトヲ許サ、ルハ何人ト雖モ自己ノ害ト爲ル可キコトヲ証スルノ義務ナシトノ原則ヲ擴張シタルモノトス法律ニ於テ是等ノ者ハ固ヨリ被告人ヲ容隠スルコトヲ許セリ故ニ正當ノ証人タルコトヲ得ス
- 三 第百八十二條第六ニ記載シタル者ハ被告事件ノ影響ヨリシテ其結果ヲ畏ル、ノ念慮ナキニ非ス故ニ嫌疑ノ爲メ正當ノ証人タルコトヲ許サ、ルナリ

○無能力ニ付テ証人タルコトヲ許サ、ルノ理由

- 一 十六歳未満ノ幼者ハ唯法律上ヨリ能力ノ充分ナラサル者ト看做ス

ニ過キス實際ニ於テハ必スシモ然ラズ故ニ公判ニ於テハ其教育及
 ヒ成長ノ度ニ從ヒ正當ノ証人ヲテシムルヲ得ヘキニ似タリ然レ
 共幼者ヲシテ偽誓ノ責ニ任セシムルハ法律ノ忍ヒサル所ナルヲ以
 テ訴訟關係人ノ異議ナキモ之ヲ許サル可シ

二 精神錯亂シタル者ハ証人ト爲ス可カラサルコトハ言テ候ダス然レモ
 第一病勢ノ爲メ一時錯亂シタル者ハ其病ノ快復ヲ待テ直ニ正當ノ
 証人ヲラシムルヲ得ヘシ第二時間ヲ限リテ發狂スル者ノ如キハ
 醫師ノ診斷ニ依リ正當ノ証人ヲラシムルヲ得ヘシ第三白痴及ヒ
 瘋癲ノ如キハ其言事實ニ適スルコトナキニ非スト雖モ正當ノ証人タ
 ルコトヲ許セス公判ニ於テ訴訟管係人ノ異議ナシト雖モ亦同シ

三 瘖啞者ハ必スシモ其精神ノ充分ナラサル者ト認ムルニ非ス耳聞ク
 コ能ハス口言フコ能ハサル者人事ノ經研充分ナラサルニ因リ其
 思想モ亦常人ノ思想ト同視ス可カラズ且其口供ハ其思想ニ適合ス

ルヤ否モ亦充分ナラス故ニ公判ニ於テ訴訟管係人ノ異議ナキモ正
 當ノ証人タルコトヲ許サス

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯

セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條
 ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ
 控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辨護人代書人公證人若クハ神
 官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受
 ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

○宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル証人ノ處分

一 証人宣誓ヲ肯セサル時ハ其陳述ヲ肯セサル者ナルヤ否ヲ問ハス陳
 述ヲ肯セサル者トシテ之ヲ罰ス何トナレハ故ナク宣誓ヲ肯セサル

証人ヲシテ陳述ヲ爲サシムルモ事實參考ニ供スルニモ足ラサルヲ以テ其陳述ナキニ同シカル可シ

二 証人宣誓シテ陳述ヲ肯セサルハ直ニ之ヲ偽証ト認ム可カラス何トナレハ証人ノ無言ナルハ事實ヲ掩蔽スルノ所爲ナリト雖モ事實ヲ証スルノ所爲トス可カラス事實ヲ証スルノ所爲ナキ時ハ偽証ノ罪質ヲ具備セサルモノトス

三 証人最初ヨリ呼出ニ應セサル者ニ比スレハ呼出ニ應シ出廷シテ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル者ニ付テノ罰金頗ル夥多ナルヲ以テ其權衡ノ不同ナルヲ疑フ者アラソ然レハ呼出ニ應セサル者ハ必スシモ事實ヲ掩蔽スルノ意アル者ト認ム可カラス且呼出ニ應セサルモ之ヲ引致スルノ方法アリ然レモ宣誓ヲ肯セス又ハ陳述ヲ肯セサル証人ニ付テハ他ニ施ス可キノ方法ナシ且鑑定人ノ如キハ他ニ求ムルヲ得ヘシト雖モ証人ハ他ニ求ム可カラス故ニ鑑定

人鑑定ヲ肯セサルニ付テノ罰金ト同一ナルハ仍ホ其刑ノ輕キヲ覺ノ

○醫師藥商等第二項ニ記載シタル者ニ付テハ第一項ノ例

ニ依ラサル理由

一 第二項ノ規則ハ被告人又ハ被告人ト他人トノ間ニ牽連シタル犯罪ニ適用スルヲ得ヘシト雖モ被告人ト第二項ニ記載シタル者トノ間ニ牽連シタル犯罪ニ適用スルヲ得ス故ニ第二項ニ記載シタル者被告人ノ依頼ヲ受クルモ其依頼ニ依テ爲ス可キ事件ニ付テハ法律ニ悖戻セサルヲ要ス

二 第二項ノ例外ヲ設ケタルハ犯罪取調ノ方法ト國民保護ノ方法ト牴觸シテ別ニ著シキ弊害ヲ醸スノ恐アルヲ以テナリ蓋シ何人ト雖モ正當ナル法廳ノ言渡アルマテハ國民保護ノ外ニ置カル、コナカル可シ

三 秘密ノ事件ヲ發露セシムルハ唯其被告事件ニ付キ一度之ヲ能ス可

シテ雖モ終ニ第二項ニ記載シタル者ニ向テ秘密ヲ談スル者ナキニ至ル可キヲ以テ却テ之ヲ發露セシムルコトノ取調上ニ有益ナラサルヲ知ル可シ加之一般ノ安寧ニ妨害アルニ因リ刑法第三百六十條ニ於テハ猥リニ秘密ノ事件ヲ發露シタル者ヲ罰スルニ至レリ

○犯罪取調ノ方法ト國民保護ノ方法ト抵觸ス可キ弊害

- 一 醫師藥商穩婆ノ如キハ衛生上一日モ缺ク可カラザル者トス然ルニ他人ト鬥毆シテ被傷シタル者アリ犯姦シテ分娩ス可キ婦アリ鬥毆罪犯姦罪ノ發覺ヲ畏レテ治術ヲ乞ハス隨テ其姓名ノ危險ヲ招クニ至ラシムルハ國民保護ノ方法ヲ妨グルノ大不幸ト謂フ可シ
- 二 代言人辯護人代書人ノ如キハ被告人ニ代テ辯護ス可キモノトス即チ被告人ノ猶ナリ戈ナリ若シ是等ノ者ニ猶チ棄テ戈ヲ倒ニスルコト許サハ辯護者ニ非スシテ政府ノ間諜者タルニ過キス誰カ間諜者ニ身体財産ノ保護ヲ依頼スル者アラシヤ

三 公証人ノ如キハ法律上禁止スル所ノ契約ヲ公証ス可キニ非ス又之

ヲ公証ス可キコトヲ依頼スル者モ有ラサル可シ然レモ秘密ノ契約ニ至テハ多クハ將來ヲ期スルモノナレハ中途ニシテ之ヲ發露スルコトアラハ其契約ノ水泡ニ屬スルコトアル可シ其弊害ハ單リ被告人ノミナラス外人ニ波及シ隨テ公証ノ信憑ヲ失スルニ至ル可シ刑法第三百六十條ニ公証人ヲ掲載セサルハ立法官ノ遺忘ニ非ス我邦未ダ公証人ノ制アラス其身分及ヒ職務等未ダ定マラサルニ依リ同條ノ場合ノ如キモ亦後日ヲ待テ別段ノ規則ニ之ヲ定ムルカ又ハ新ニ刑法ニ之ヲ定ムルナル可シ

四 神官僧侶ニ依頼ス可キ秘密ノ事件ハ懺悔若クハ心願等ナリ教導ノ

職ニ在ル者ハ務メテ前非ヲ悔悟セシメ又ハ不當ノ願望ハ之ヲ告戒シ幾分かハ公安ヲ保護スルニ利益アルモノトス若シ其秘密ノ事件ヲ發露スルコトアラハ懺悔又ハ告戒ノ水泡ニ屬スル而已ナラス教導

ノ道モ亦隨テ閉塞スルニ至ル可シ
第三百八十四條 證人ハ他ノ證人及ビ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第三百八十五條 豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第三百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第三百八十六條 第三百五十六條第三百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

○被告人ノ訊問及ビ對質ニ付キ前節ニ定メタル規則ト參照ス可キ條件

一 第三百八十四條但書ハ第三百五十四條ニ異ナルコトナシ而シテ豫審密行ノ主義ニ基キ各別ニ訊問ス可キコトハ被告人ノ訊問ニ付テモ亦之ヲ適用セサル可カラズ

二 第三百八十六條ニ第三百五十六條第三百五十七條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス可キコトヲ定ム而シテ証人ノ對質ニ付キ第三百五十五條ヲ適用ス可キノ明文ナシト雖モ同條ニ從フ可キハ當然ナル可シ

○犯所又ハ其他ノ場所ニ證人ヲ同行スルニ付テノ處分

一 証人オシテ現場ニ就テ直ニ實況ヲ指示セシムルハ事實ヲ証スルニ最モ必要ナルコトアル可シ若シ証人同行ヲ肯セサルモ直ニ陳述ヲ肯セサル者ト看做ス可カラズ故ニ呼出ニ應セサルノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡スニ止ル然レモ時宜ニ依リ第三百七十六條ニ從ヒ強テ之ヲ引

致スルコト能ハサルニ非ス此場合ニ於テ陳述ヲ肯セサル時ハ刑法第
百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

二 第六十三條第二項但書ニ從ヒ被告人ニモ亦第八十五條ノ規則
ヲ適用スルコトヲ得ヘシ然レモ被告人同行ヲ肯セサルモ之ヲ罰スル

○高貴ノ人ノ陳述ヲ聽ク可キ手續
一 皇族勅任官ノ所在ニ就テ陳述ヲ聽クニハ別段政府ノ允許アルヲ要
セス且其陳述ヲ聽キ調書ヲ作ルニ付テハ更ニ常人ニ付テノ規則ト
異ナルコトヲカカル可シ

○公判ニ於テ本條ト同一ナル場合ノ手續
一 公判ニ於テハ明文ナシト雖モ亦本條ノ規則ニ依リ裁判長自ラ書記
ト共ニ高貴ナル人ノ所在ニ就テ其陳述ヲ聽キ又ハ陪席判事ヲシテ
其陳述ヲ聽カシメ第八十六條第二項ノ旨趣ニ基キ公廷ニ於テ
其調書ヲ朗讀ス可シ

二 既ニ豫審ニ於テ高貴ナル人ノ陳述シタル調書アル時ハ更ニ其陳述
ヲ聽クコトヲ要セス第八十六條第二項ニ從ヒ公廷ニ於テ之ヲ朗
讀ス可シ然レモ更ニ其陳述ヲ聽クコトノ必要ナル時又ハ檢察官其他
訴訟管係人ノ請求アル時ハ格別ナリトス

○外國公使ノ陳述モ亦其所在ニ就テ之ヲ聽クコトヲ得ヘシ然レモ豫
政府ノ允許ヲ得サル可カラズ且外國公使宣誓又ハ陳述ヲ拒ムコトア
リト雖モ直ニ常人ニ付テノ規則ヲ適用スルコトヲ得ス

○公判ニ於テ本條ト同一ナル場合ノ手續
一 公判ニ於テハ明文ナシト雖モ亦本條ノ規則ニ依リ裁判長自ラ書記
ト共ニ高貴ナル人ノ所在ニ就テ其陳述ヲ聽キ又ハ陪席判事ヲシテ
其陳述ヲ聽カシメ第八十六條第二項ノ旨趣ニ基キ公廷ニ於テ
其調書ヲ朗讀ス可シ

二 既ニ豫審ニ於テ高貴ナル人ノ陳述シタル調書アル時ハ更ニ其陳述
ヲ聽クコトヲ要セス第八十六條第二項ニ從ヒ公廷ニ於テ之ヲ朗
讀ス可シ然レモ更ニ其陳述ヲ聽クコトノ必要ナル時又ハ檢察官其他
訴訟管係人ノ請求アル時ハ格別ナリトス

○公判ニ於テ本條ト同一ナル場合ノ手續

一 公判ニ於テハ明文ナシト雖モ亦本條ノ規則ニ依リ裁判長自ラ書記

ト共ニ高貴ナル人ノ所在ニ就テ其陳述ヲ聽キ又ハ陪席判事ヲシテ

其陳述ヲ聽カシメ第八十六條第二項ノ旨趣ニ基キ公廷ニ於テ

其調書ヲ朗讀ス可シ

二 既ニ豫審ニ於テ高貴ナル人ノ陳述シタル調書アル時ハ更ニ其陳述

ヲ聽クコトヲ要セス第八十六條第二項ニ從ヒ公廷ニ於テ之ヲ朗

讀ス可シ然レモ更ニ其陳述ヲ聽クコトノ必要ナル時又ハ檢察官其他

訴訟管係人ノ請求アル時ハ格別ナリトス

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作

ル可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サルノ事由
ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ヲキヤ否
ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
證人ハ其陳述ヲ變更増減センヲ請求スルヲ得書記ハ
其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ
豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名
捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

○證人訊問調書ノ記載法

一 證人ハ各別ニ訊問スルヲ以テ各別ニ調書ヲ作ル可キハ言テ候タス
其調書ニハ宣誓書ヲ添ルヲ以テ宣誓ヲ爲シタルヲ記載スルハ別

段必要ナラスト雖モ宣誓ヲ爲サルノ事由ヲ記載スルハ取調上最
モ必要ナリトス

二 證人訊問調書ノ記載法及ヒ其手續ハ被告人訊問調書ト毫モ異ナル
ヲ無シ總テ第四節ヲ參看ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ム
ルヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日
稼高二等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其額ヲ定メ之ヲ言渡ス可
シ

○證人ノ費用

一 告發人ノ如キハ法律ニ於テ別段告發ス可キノ責任ヲ負ハシメタル

ニ非テ故ニ告發ニ付テノ費用ヲ求ムルヲ得サル可シ告發人ノ如クモ亦同シ假令告發人告發人ニシテ證人ト爲リタル時ト雖モ證人トシテ出廷シタル費用ノ外請求スルヲ得ス然レモ告發人私訴ヲ爲シタル時ハ被告入ニ對シ告發ノ費用ヲモ并セテ要求スルヲ得ヘシ何トナレハ其告訴ヲ爲スニ至リシメタルモ被告入ノ所爲ナレハナリ然レモ私訴ノ費用ナルニ因リ官ニテ一時之ヲ代償スルニ及ハス

二 證人ハ社會ニ對シ其見聞ニ屬スル事件ヲ證明スルノ責任アリ然レモ多クハ國民ノ義務ナリトシテ其費用ヲ要メサル者モ有ル可シ法律ニ於テハ唯旅費日當ノミハ當然之ヲ要ムルヲ得ヘキヲ決定ム是等ノ費用ハ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シト雖モ官ヨリ一時之ヲ代償ス

三 日稼ノ生業トハ僅ニ其日ノ營利ヲ以テ其日ノ口糊ニ充ツル者ヲ謂

フ故ニ日稼高ニ等シキ賃金ヲ得ント欲スル者ハ家ニ妻子等アリテ自ラ生業ニ從事セザレバ他ニ其日ノ飢渴ヲ防ク可キ方法ナキヲ證明ス可シ果シテ本條第二項ニ適合ス可キ者ナルト否トハ豫審判事ノ判定ニ任ス

第七節 鑑定

○鑑定ノ解

- 一 鑑定モ亦囑託ノ如ク裁判官自ラ行フヲ能ハサル事件ヲ他人ニ委任シテ行ハシム可キ取調ノ方法ナリトス
- 二 鑑定人ハ證人ノ如ク犯罪事件ニ附着シテ生スル者ニ非テ特別ナル識能ニ依リ撰任セラレ、者ニシテ其職務ヲ行フハ裁判官ト均シク自由隨具敢テ他ノ拘束ヲ受クルコトナカル可シ
- 三 鑑定人ハ鑑定ヲ爲ス可キ件ニ付キ必要ナルコトヲ除クノ外他ノ證據

ヲ参照スルコトヲ要セズ唯自己ノ學術經研ニ因テ知得ヘキ範圍内ニ止ル

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

○犯罪ノ性質方法及ヒ結果

- 一 犯罪ノ性質ハ殺害事件ナレハ其謀殺ナルコト又ハ故殺ナルコト等ヲ謂フ其性質ハ犯罪ノ方法及ヒ結果ヲ鑑定セシメタル上ニテ之ヲ定ム可キモノトス
- 二 犯罪ノ方法トハ罪ヲ犯シタル手續ヲ謂フ其手續ヲ分明ナラシムルハ譬ヘハ被告人第一ノ毆撃ヲ爲シタルハ云々ノ模様ナリトス即チ

云々ノ傷痕ヲ以テ之ヲ徵スルコト足レリ第二ノ毆撃ヲ爲シタルハ云々等ヲ實測セシムルコト在リ

三 犯罪ノ結果トハ被告人ノ所爲ニ因リ生スル所ノ効驗ヲ謂フ其効驗ヲ分明ナラシムルハ譬ヘハ面部ニ云々ノ刃痕アリ又ハ被害者ヲ解剖スルニ腹部ニ云々ノ毒藥アリ其刃痕又ハ毒藥ノ分量ハ被害者ヲシテ絶命セシムルニ充分ナリ云々等ヲ實測セシムルニ在リ

○學術職業

- 一 學術トハ教師又ハ書籍ニ就テ習熟シタル識能アルヲ謂フ
- 二 職業トハ多年ノ經研ニ依テ鍊磨シタル識能アルヲ謂フ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス

可シ
鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ
處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス
第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

○鑑定人ノ呼出及ヒ呼出ニ應セサルニ付テノ處分

一 鑑定人ヲ呼出スハ證人ヲ呼出ニ付テ定メタル規則ト毫モ異ナルヲ
無シ然ルニ第七十一條ニハ證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出
ス可シトアリ本條第一項ニハ書記局ヨリ呼出ス可シトアルコ因リ
書記ノ名ヲ以テ呼出ス可キモノト誤解スルヲ免カニス若シ單ニ呼
出狀ヲ作り及ヒ之ヲ送達スルヲ定メタルモノトスルモ頗ル法文
ニ缺クル所アリ即チ第七十一條第七十三條第一項ノ如キ規則
ヲ含蓄シタルモノト看做スヲ能ハサル可シ

二 鑑定人呼出ニ應セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得スト雖モ再度ノ

呼出狀ヲ發スルヲ得ヘキヤ否ハ分明ナラス然レモ再度ノ呼出狀
ヲ發セサルモノトスル時ハ第七十六條ニ從ヒ急速ナル處分ヲ爲
スニ及ハス且初度ノ呼出ノミニテハ鑑定人再度ノ呼出ニモ應セサ
ルモノト確認スルヲ能ハサル場合ナシトセス再度ノ呼出ヲ爲スヲ
得ヘキ時ハ再度ノ呼出ニ應セサルニ付テ罰金ヲ言渡スヲ得ル
ハ言ヲ候タサルナリ

○呼出ニ應セサル證人ニ對シ勾引狀ヲ發スルヲ得ト雖
モ鑑定人ニ對シ之ヲ發スルヲ得サルノ理由

一 證人ノ義務ハ其見聞シタル事件ヨリ生スルヲ以テ之ヲ他人ニ負擔
セシム可カラス故ニ出廷ヲ肯セサルハ之ヲ勾引シ疾病事故アル
ハ其所在ニ就テ訊問スルモ亦已ムヲ得サルノ處分ト謂フ可シハ

二 鑑定人ノ義務ハ自己ノ一身ニ限ル可キニ非ス他ノ同業同業ノ者ハ
總テ之ヲ負擔モサルヲ得ス故ニ呼出ニ應ゼス下雖モ強テ勾引スル
コトヲ得サルモノトス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キ少宣誓ヲ爲ス
可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記
載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ
肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十
九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障
及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル
者ニハ鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人
ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコ
トヲ得

○鑑定人宣誓ノ規則及ヒ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定
ヲ肯モサルニ付テノ處分

一 鑑定人ノ宣誓式ハ證人ト異ナルコトナシ然レモ第百八十一條第百八
十二條ニ記載シタル者ニ付テハ事實參考ノ爲メ常ニ其陳述ヲ聽ク
コトヲ得ルト雖モ鑑定ハ急遽ノ際ニ非サレハ之ヲ爲サシムルコトナカ
ル可シ

二 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルニ付テノ處分ハ
毫モ證人ニ付テ定メタル規則ト異ナルコト無シ

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑒定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑒定人ノ請求ニ因リ又ハ職權

ヲ以テ鑒定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑒定セシムルヲ得

○鑒定ヲ命スルニ付キ裁判官ノ注意ス可キ要件

一 鑒定ハ訴訟管係人ノ請求若クハ鑒定人ノ請求ニ依リ又ハ裁判官ノ

職權ヲ以テ之ヲ命スルコアル可シ然レモ裁判官ハ訴訟關係人又ハ鑒定人ノ請求ヲ無益ナリト認ムル時ハ之ヲ却クルノ權アリ

二 鑒定人ハ最初ヨリ二名以上ヲ命スルコアリ後ニ其増員ヲ命スルコアリ又ハ別ニ鑒定人ヲ命スルコアル可シ

三 鑒定ヲ命スルコトハ鑒定ス可キ點ヲ明示シ其點ノミチ鑒定セシム可シ若シ他ノ點ヲ鑒定ス可キハ更ニ之ヲ命ス可シ

四 鑒定ヲ爲スニハ裁判官務メテ立會ヲ爲シ其手續ノ如何ヲ注視スル

ト要ス

第九十八條 鑒定人ハ鑒定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑒

定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ鑒定

人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑒定書ヲ作り又ハ各自ノ意

見ヲ一箇ノ鑒定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑒定人ハ鑒定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺

印及ヒ契印ス可シ

又鑒定書ニハ豫審判事之ヲ受取りタル年月日ヲ記載シ

書記ト共ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ。
外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作シタル譯本ヲ添置ク可シ

○鑑定書ノ記載法

- 一 鑑定ノ手續ヲ記載スルハ結果ヲ得ルノ方法ヲ示ス爲メ最モ必要ナリトス故ニ其方法ニ付テモ意見ヲ付スルコトアル可シ
- 二 鑑定ノ結果ハ必スシモ犯罪ノ結果ト同シカラス或ハ有罪タル可キ結果ヲ得ルコトアリ或ハ無罪タル可キ結果ヲ得ルコトアル可シ何レノ場合ニ於テモ其確認スル所ノ理由ヲ付スルヲ要ス
- 三 鑑定ノ結果ヲ得サルトハ事迹ノ確認シ難キヲ謂フ此場合ニ於テハ其推測スル所ヲ記載シ其理由ヲ記載スルヲ要ス
- 四 鑑定ヲ始メタルヨリ之ヲ終リタルマデノ時間ヲ記載スルハ鑑定ノ

難易得失ヲ詳ニシ且費用ノ計算ヲ爲スニ付キ必要ナリトス

- 五 鑑定人ハ自カラ鑑定書ヲ作ルヲ以テ自カラ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ被告人證人ノ陳述書ノ如キハ官吏之ヲ作ルヲ以テ少シシテ法式ノ異ナル所アリ

- 六 豫審判事書記鑑定書ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ署名捺印スルハ之ヲ否認ス可キ爲メナリトス

- 七 外國人ヲシテ鑑定セシメタル時第五十七條ノ規則ニ從ヒ通事ヲ命シテ譯本ヲ作ラシム但第九十九條ノ法式ハ鑑定書ノ正本及ヒ譯本ニモ亦之ヲ適用セサル可カラス

○鑑定人數名アル場合ニ於テ鑑定書ヲ作ルノ方法

- 一 豫審判事最初ヨリ數名ノ鑑定人ヲシテ各自ニ鑑定ヲ爲シタル時ハ勿論各自ニ鑑定書ヲ作ラサル可カラス若シ數名ノ鑑定人ヲシテ共ニ鑑定ヲ爲サシメ共ニ意見ヲ同フスルキハ一箇ノ鑑定書ヲ以

テ足レリトス
 二 數名ノ鑑定人ヲシテ共ニ鑑定ヲ爲サシメタル場合ニ於テ其手續ニ付キ各自意見ヲ異ニスルキハ豫審判事ノ指揮ニ依リ各自ニ鑑定ヲ爲シ又ハ單ニ意見ノ同シキ者ノミヲシテ鑑定ヲ爲サシムルコトアル可シ

三 若シ其結果又ハ結果ノ推測ニ付キ各自意見ヲ異ニスルキハ鑑定ノ手續ヲ記載シタル後ニ各自ノ意見ヲ記載シ又ハ各自ニ鑑定書ヲ作ルコトアル可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

○鑑定人通事ノ費用

一 告訴人告發人ノ如キ其告訴告發ノ費用ヲ請求スルコトヲ得ス證人ノ

二 如キハ其出廷ノ旅費日當ノミヲ請求スルコトヲ得唯日稼ヲ以テ生業トスル者ニ付テハ法律ノ慈惠ヲ以テ日稼高ニ等シキ償金ヲ請求スルコトヲ許セリ其理由ハ第九十條ニ於テ解説セリ然ルニ鑑定人通事ニハ旅費給料ノ外相當ノ費用ヲ給與スルハ畢竟其責任ノ異ナル所以ナリ

二 告訴人告發人ノ如キハ其責任アルニ非ス仮令少シシ其責任アリトスルモ費用ヲ給與スルニ至テハ夥多ナル冗費ヲ要スル而已ナラス徒ニ費用ヲ貪ル爲メ讒誣ノ弊風ヲ生スルニ至ル可シ證人ノ如キハ其見聞スル所ノ事實ヲ證明スルノ責任アリ且自ラ好テ證人タル可キモノニ非カルヲ以テ相當ノ費用ヲ給與セサル可カラス然レド證人タル可キ者ハ事實ヲ見聞シタル者ノ外他ニ之ヲ求ム可カラサルニ因リ社會ノ爲メ務メテ事實ヲ證明スルノ義務アリトス故ニ旅費日當ヲ給與スルニ止ル鑑定人ノ如キモ社會ニ對シ鑑定ス可キノ義務

ナキニ非ス然レモ鑑定ノ義務ハ其者一人ニ限ル可キニ非ス故ニ旅費及
ヒ相當ノ給料ノ外鑑定ノ爲メ費シタル金額ヲモ給與セサル可ガラス

第八節 現行犯ノ豫審

○現行犯ノ豫審處分

- 一 現行犯ノ手續ヲ設ケタルノ理由ハ第一章第二節ニ於テ説明セリ畢
竟現行犯ト雖モ取調ノ手續ニ於テハ非現行犯ト格別ノ差異アルニ
非ス唯急速ヲ要スル事件ナルニ因リ官吏ノ權限ニ非常ナル差異ヲ
生スルモノトス
- 二 官吏ノ權限ニ非常ナル差異ヲ生スルハ唯己ニテ得サルノ場合ニ止
ルヲ以テ被告人ノ逮捕犯所ノ臨檢等急速ヲ要スル處分既ニ終ル
ハ速ニ常例ニ復セサル可ガラス
- 三 現行犯ト雖モ禁錮以上ニ該ル可キ者ニシテ瞬間モ等閑ニ付スルコト

能ハサル事件ニ非サレハ急速ナル處分ヲ要セサル可シ故ニ罰金ニ
該ル可キ輕罪又ハ新聞條例ニ觸レタル罪ノ如キハ現行犯ノ處分ヲ
爲スニ及ハス

○現行犯ト非現行犯トノ豫審ノ差異

- 一 豫審判事第百十三條ノ原則ニ反シ請求ヲ待タスシテ被告事件ノ取
調ニ着手スルコト
- 二 豫審判事第二章ノ規則ニ依ラスシテ公訴ヲ受理スルコト
- 三 檢事自ラ豫審處分ノ幾部ヲ行フコト
- 四 檢事モ亦臨檢調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ起スコト
- 五 司法警察官モ亦檢事ニ許シタル職務ノ幾部ヲ仮行スルコト
- 六 檢事司法警察官ヨリ送致シタル事件ニ付キ訊問調書ヲ作ルヲ以テ
公訴ヲ起スコト

第二百一一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

○檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合

- 一 檢事ヨリ先ニ知リタルヤ否ハ必スシモ之ヲ穿鑿スルニ及ハス唯檢事若クハ司法警察官ノ取調ニ着手シタルヲ確知セサルヲ以テ自ラ豫審ニ着手スルニ充分ナル推測アリトス

- 二 豫審判事ト檢事ト期セスシテ同時ニ犯所ニ臨檢シタル場合等ノ如キハ豫審判事檢事未タ豫審ニ着手セサルキハ檢事豫審ヲ請求シ且

其處分ニ立會ヒ臨時ノ請求ヲ爲ス等總テ常例ニ從フ可シ

- 三 豫審判事未タ犯所ニ着セサル前檢事既ニ豫審處分ニ着手シタルキハ豫審判事ノ着スルニ當リ直ニ其處分ヲ豫審判事ニ譲リ又ハ其着手シタル手續ヲ終リタル上ニテ之ヲ豫審判事ニ譲ル可シ此場合ニ於テモ檢事ハ常例ニ從ヒ豫審判事ノ處分ニ立會ヒ臨時ノ請求ヲ爲スヲ得

○檢事ノ請求ヲ待タス直ニ其旨ヲ通知シ云々ノ解

- 一 檢事ノ請求ヲ待タサルハ第一百十三條ノ原則ニ對スル例外ナリトス蓋シ事件ノ急速ナルト事證ノ明白ナルトニ因リ同條ノ原則ニ反スルヲ許ス

- 二 其旨ヲ通知スルハ檢事ノ起訴ヲ實行スルニ差支ナキヲ要スルモノトス蓋シ檢事ハ現行犯ノ事件ト雖モ臨時ノ請求及ヒ終結ノ請求ヲ爲スノ權ヲ失フコトナル可シ

○豫審判事現行犯ノ場合ニ於テ檢事ノ請求ヲ待タスシテ
行フヲ得ヘキ豫審手續

- 一 本條第二項ノ文義ハ沈博ニシテ毫モ制限ナキニ似タリ然レモ法律ニ於テ別段檢事ノ意見ヲ聽ク可キヲ定メサル豫審手續ノニ總テ之ヲ行フヲ得ヘシ
- 二 公訴ノ起リタリ以上檢事ノ意見ヲ聽カスシテ行フヲ得ヘキ手續ハ第一召喚狀勾引狀勾留狀ヲ發スルヲ第二被告人證人ヲ訊問スルヲ第三臨檢及ヒ物件差押ヲ爲スヲ第四通事及ヒ鑑定人ヲ命スル等ナリ
- 三 公訴ノ起リタル後ト雖モ檢事ノ意見ヲ聽カサレハ行フヲ得サル手續ハ第一収監狀ヲ發スルヲ第二證人鑑定人等ニ對シ罰金ヲ言渡スヲ第三保釋ヲ許スヲ第四豫審終結ノ言渡ヲ爲スヲ等ナリ

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ

豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者ト
ス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其
豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通
常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

○起訴ナクシテ公訴ヲ受理スルノ理由

- 一 公訴ヲ受理スルノ方法ニ二種アリ第一檢察官及ヒ民事原告人ノ記
訴第二現行犯罪檢證及ヒ公庭内ノ犯罪檢證ナリトス告ヲ待テ受理
スルノ原則ヨリシテ論スルルハ第一ノ場合ハ常例ニシテ第二ノ場
合ハ非常例ナリトス
- 二 第二ノ場合ニ於テハ告ヲ待タスシテ受理スルヤ明ナリ然レモ起訴
ナクシテ豫審ニ着手スルハ職務權限ノ主義ニ悖戾スルヲ以テ法律

上既ニ檢證アリタルハ公訴ノ起リタル者ト看做不可キ而已
 三 檢證スルニハ調書ヲ作ラサルヲ得ス故ニ調書ヲ作ルト否ト最モ
 判然タルヲ以テ公訴ノ起ルト否トノ區域ヲ定ムルニ頗ル其當ヲ得
 タルモノトス但調書ヲ作ラスト雖モ令狀ヲ發スル等判然タル豫審
 處分ノ一部ヲ行フタルハ公訴ノ起ル可キハ當然ナリ

○現行犯ノ書類ヲ檢事ニ送致スルノ理由

一 檢事ハ豫審判事現行犯ノ豫審ニ取掛ル前ニ一應其通知ヲ受クルニ
 因リ既ニ公訴ノ起リタルヲ知ルヲ以テ何時ニテモ其實行ノ手續
 ナ爲ストナ得ヘシ然レモ實際急遽ノ場合ナルニ因リ公訴實行ノ手
 續ヲ爲スニ暇ナカル可シ故ニ豫審判事ハ急速ヲ要スル處分ヲ終リ
 タル上ニテ更ニ書類ヲ檢事ニ送致シテ通常ノ手續ニ復スルヲ要
 スルモノトス

二 檢事ハ豫審判事ヨリ書類ヲ受取リタル後ハ通常ノ手續ニ復スルヲ
 以テ何時之ヲ還付ス可キカ又如何ナル處分ヲ爲ス可キカヲ定メス
 若シ未タ豫審ヲ終ラサルハ第百十七條ノ手續ニ移リ既ニ豫審ヲ
 終リタルハ第二百二十條ノ手續ニ移ル可キモノトス

○公訴ノ起リタル以上ハ檢事ノ意見ニ拘ハラスシテ終結
 ス可キノ理由

一 本條第二項ノ但書ハ單リ豫審判事現行犯ノ檢證ヲ爲シタル場合ノ
 ミニ適用ス可キ規則ニ非ス總テ公訴ノ起リタル以上ハ必ス受理セ
 サル可カラズ受理シタル以上ハ必ス言渡ヲ爲サ、ル可カラズ仮令
 檢察官ヨリ起訴ヲ爲シタル事件ト雖モ亦同シ故ニ公判通則ニ於テ
 ハ明ニ其旨ヲ掲載セリ第三百一條ヲ參看ス可シ
 二 公訴權ノ起点ハ罪ト爲ル可キ事件アリタルニ始マル而シテ公訴

ノ起点ハ原告人ノ正當ナル法式ニ從ヒ訴ヲ爲シタルキニ始マルモ
ノトス然ルニ公訴權ノ起点ハ常ニ變スルコトナシト雖モ公訴ノ起点
ハ頗ル變スルコトアリ蓋シ民事原告人ノ起訴ノ如キハ第二章第二節
ニ於テ説明シタル如ク公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サシムルノ効驗ヲ
大ニシタルモノトス現行犯罪及ヒ公廷内ノ犯罪檢證ノ如キハ證據
ノ明白ナルト處分ノ急速ヲ要スルトニ因リ非常ノ特權ヲ裁判官ニ
附與シタルモノトス

三 何故ニ公訴既ニ起リタル以上ハ必ス受理シ受理シタル以上ハ必ス
言渡ヲ爲サ、ル可カラサルカ蓋シ第一裁判官ハ告ナケレハ理セス
之ニ反シテ告アレハ必ス理セサルヲ得ス公訴既ニ起リタルキハ如
何ナル場合ト雖モ告アリタルト同一ナリ第二刑事ハ民事ノ如ク棄
權私和若クハ願下ヲ爲スコトヲ得ス故ニ公訴ノ起リタルキヲ受理セス
受理シテ言渡ヲ爲サ、ルハ裁判官ノ職務ヲ弄ヒ社會ノ信憑ヲ失ス

ルコト其害少カラサル可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪ア

ルコトヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知
シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得
但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク
可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書

ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

○檢事現行犯ノ處分

一 檢事現行犯ノ豫審ヲ爲スニ付キ其旨ヲ豫審判事ニ通知スルハ急速

ノ際ナルニ因リ常例ニ從フヲ能ハスト雖モ若シ豫審判事差支ナキ
キハ自ラ檢事ニ引續キ臨檢ノ處分ヲ爲スヲ妨ケサル爲メナリト
ス然レモ實際ニ於テハ通知ノ法式アル而已ニシテ檢事臨檢シタル
キハ豫審判事引續キ臨檢スル等ハ甚タ稀ナル可シ加之豫審判事檢
事現行犯ヲ臨檢スルヲモ亦稀ニシテ多クハ司法警察官ノ臨檢ノ
處分ヲ爲スナル可シ

二 本條ノ文義上ヨテハ檢事犯所ニ臨檢スルニ非サンハ現行犯ノ豫審
ヲ爲スヲ能ハサルニ似タリ固ヨリ現行犯ノ豫審ハ臨檢ノ場合ニ屬
スルヲ多カル可シト雖モ若シ臨檢ヲ要セサルモ急速ノ處分ヲ爲ス
可キヲアルキハ檢事モ亦豫審判事ト均ク直ニ豫審ニ着手スルヲ
得ヘシ

三 檢事ハ現行犯ノ場合ニ於テ豫審判事ニテ檢事ノ意見ヲ聽カスヲ
行フヲ得ヘキ處分ハ總テ之ヲ行フヲ得檢事ノ意見ヲ聽カサレ

ハ行フヲ得サル處分ハ單リ罰金ノ言渡ノミナラズ總テ之ヲ行フ
ヲ得サル可シ

○罰金ヲ言渡ス可キ場合ノ手續

- 一 豫審中罰金ヲ言渡スハ證人鑑定人通事呼出ニ應セス又ハ宣誓ヲ肯
セス若クハ宣誓シテ申立ヲ爲スヲ肯セサル場合ナリトス然レモ
檢事ハ宣誓セシムルヲ得サルヲ以テ罰金ノ言渡ヲ爲ス可キ場合
ハ呼出ニ應セサル時ノミナル可シ即チ第五百五十七條第三項第七
十六條第百八十三條第百九十二條第百九十四條ヲ參看ス可シ
- 二 現行犯ノ場合ニ於テハ急報ヲ以テ證人鑑定人等ヲ呼出ス而已ニシ
テ正當ノ呼出狀ヲ發スルハ甚タ稀ナル可シ然レモ若シ之ヲ發シタ
ル場合ニ於テ其呼出狀ニ應セサルキハ罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ス
ト雖モ再度ノ呼出狀ヲ發シ又ハ證人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルヲ
得ヘシ而シテ其呼出ニ應セサルノ事件ニ付テハ豫審判事ノ裁判

○ 檢事現行犯ノ取調ヲ終リタル以上ノ處分

一 第一百七條第一第二ニ定メタル規則ニ從ヒ仍ホ豫審判事ノ取調ヲ要ス可キモノト思料シタルキハ第二百四條ニ其事件ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

二 若シ豫審判事ノ取調ヲ要セスト思料シタルキハ第二百九條ニ從ヒ直ニ輕罪裁判所ニ被告人ヲ呼出スヲ得

○ 檢事豫審判事現行犯處分ノ差異

一 第二百三條第一項ニ罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ストアリ是レ檢事ノ權ヲ減殺シタルニ非ス豫審判事ト雖モ通常檢事ノ意見ヲ聽カサレハ行フヲ能ハサル處分ハ現行犯ノ場合ニ於テモ之ヲ行フヲ能ハス且罰金ノ言渡ノ如キハ眞ノ裁判權内ニ屬スルモノニシテ檢事ノ意

見ヲ聽カサレハ之ヲ爲スヲ能ハサル可シ豫審判事ノ爲スヲ能ハサル處分ハ檢事モ亦之ヲ爲スヲ能ハサルハ當然ナリ法律ハ唯注意ノ爲メ罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得サルノ但書ヲ掲載シタルニ過キス

二 檢事ハ證人鑑定人ヲシテ宣誓セシムルヲ能ハサルハ少シク檢事ノ權ヲ減殺シタルニ似タリト雖モ是亦己ムヲ得サルヲ有リ何トナレハ現行犯ノ豫審處分ハ輕易ナル輕罪事件ヲ除クノ外到底更ニ豫審判事ノ取調ヲ求メサル可カラズ故ニ第二百八條ニ豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ヲ調直スヲ得ヘキノ明文アリ若シ檢事宣誓セシムルヲ得ルキハ豫審判事調直ヲ爲スニ付キ再誓セシメサルヲ得サル如キノ不都合アル可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司

法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得

得ス
司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添へ被告人ト共ニ速
ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

○司法警察官現行犯ノ處分

- 一 法律ニ於テハ現行犯ノ豫審處分ト雖モ司法警察官ヨリモ寧ロ檢事
ノ之ヲ行フコト好シ檢事ヨリモ寧ロ豫審判事ノ之ヲ行フコト好ハ
ナル可シ然レモ實際ニ於テハ豫審判事ヨリモ寧ロ檢事ノ之ヲ行フ
コト多ク檢事ヨリモ寧ロ司法警察官ノ之ヲ行フコト多カル可シ故ニ現
行犯ニ付テ非常ノ實權ヲ有シ非常ノ實効ヲ奏スル者ハ司法警察官
ナリ其職ニ在ル者ハ平常其處分ニ注意セサルヲ得ンヤ
- 二 司法警察官ハ檢事ニ許シタル職務ヲ代行スルヲ以テ其手續ヲ行フ
ハ檢事ト異ナルコトナル可シ然レモ第二百三條ニ從ヒ現行犯ノ處

分ニ付キ必スシモ豫審判事ニ通知ヲ爲スニ及ハス何トナレハ檢事
ト豫審判事トハ其職務ノ相牽連スル而已ナラス平常同一ノ裁判所
ニ在ルヲ以テ往復ノ手數タル甚タ容易ナル可シ然レモ司法警察官
ハ輕罪裁判所ヨリ數里外ニ在勤スルコトアリ急遽ノ際ニ當リ其手數
ノ無益ニ屬スル而已ナラス其處分タル公訴ヲ起スノ効力ナキヲ以
テ其通知ヲ爲スノ必要ナルコトナル可シ故ニ第二百六條第二項ニ
檢事ハ司法警察官ノ處分シタル事件起訴ヲ爲ス可カラサルモノト
思料スルキハ其事件ヲ豫審判事ニ送致スルヲ要セス直ニ被告人ヲ
放免ス可キコト定ム若シ豫メ豫審判事ニ通知ス可キ者ナルキハ更
ニ豫審判事ニ通知セスシテ是ノ如キ處分ヲ專行スルノ理アラシヤ
三 司法警察官ハ現行犯ニ付キ檢事ニ許シタル職務ヲ仮行スルニ過キ
サルヲ以テ其長官タル檢事ノ取調ヲ經サレハ公訴ノ起リタルモノ
トス可カラヌ故ニ被告人ニ對スル令狀ハ勿論證人鑒定人ニ對シ治

罪法ニ定メタル呼出狀ヲ發スルヲ得ス
 四 司法警察官現行犯ノ處分ヲ爲シタル以上ハ第二項ニ從ヒ被告人ヲ逮捕シタルト否トニ拘ハラズ必ス其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ擅ニ之ヲ拋棄スルヲ得ス何トナレハ告訴發テ受ケタルト均シク其起訴ヲ爲ス可キヤ否ヲ認定スルハ全ク檢事ノ職權ニ屬スルモノトス

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添へ豫審判事ニ送致ス可シ若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直ニ被告人ヲ放免ス可シ

○檢事司法警察官ヨリ現行犯ニ係ル事件ノ送致ヲ受ケタ

ル以上ノ手續

- 一 檢事現行犯ノ書類又ハ被告人ヲ受取リタル時ハ豫審ノ一部ヲ行フヲ得但其一部ヲ行フタル時ヨリ公訴ノ起ルモノトス故ニ被告人ヲ訊問シテ調書ヲ作り又ハ令狀ヲ發スル等ノ處分アリタリキハ必ス其事件ヲ豫審判事ニ送致セサル可カラス
- 二 檢事ハ送致ヲ受ケタル事件起訴ヲ爲ス可カラサルモノト認定シタルキハ豫審ノ一部ヲモ爲ス可カラス且被告人逮捕セラレタルキハ之ヲ放免ス可シ但檢事一應被告人ヲ問糺シタル而已ニテ調書ヲ作ラサルキハ未ダ豫審ノ一部ニ着手シタルモノト看做ス可カラス
- 三 被告人引致セラレタリト雖モ通常勾引狀ヲ受ケタル場合ト同視ス可カラス其處分タル成ル可ク急速ナルヲ要ス故ニ二十四時内トハ被告人ヲ受取リタルヨリ訊問シテ豫審判事ニ送致シ又ハ直ニ公判ニ付スルマテヲ謂フ若シ其手續ヲ爲サ、ルキハ勾留狀ヲ發スルニ

非ナルハ第二項ニ從ヒ直ニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

○豫審判事檢事ヨリ現行犯ニ係ル事件ノ送致ヲ受ケタル以上ノ處分

- 一 檢事現行犯ニ係ル事件ヲ豫審判事ニ送致シタル以上ハ急速ヲ要スル處分ヲ終リタル後ナルヲ以テ總テ常例ニ復シ毫モ非現行犯ノ手續ト異ナルヲナカル可シ唯逮捕シタル被告人アルキハ二十四時内ニ訊問ス可キノ制限アル而已
- 二 豫審判事檢事ノ發シタル令狀ヲ存シタル場合ニ於テ勾留狀ニ付キ定メタル十日ノ期限ハ檢事ノ之ヲ發シタルヨリ起算ス可キカ豫審

判事ノ訊問ヲ爲シタルヨリ起算ス可キカノ疑アリ此疑タル檢事其期限ノ經過セントスルニ當リ送致ヲ爲シタルキハ豫審判事取調ヲ爲スノ暇ナクシテ勾留狀ヲ取消サルヲ得サルヲアル可シトノ点ヨリ出タルモノトス但法律ニ於テハ現行犯ニ付キ勾留狀ヲ發シタルヨリ數日間檢事ノ手ニ猶豫スルヲ慮ラス且猶豫ス可キヲ有ラサル可シ

三 第二百七條ハ第二百六條ノ引續ナルヲ以テ檢事ヨリ司法警察官ノ現行犯處分ニ係ル事件ノミト解ス可カラス檢事ノ現行犯處分ニ係ル事件ヲモ包含シタルモノトス

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作りタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

○豫審判事檢事ヨリ送致ヲ受ケタル現行犯ニ係ル事件ノ
調査ヲ爲スノ理由

一 第二百七條ハ現行犯ノ人ニ付テノ規則ヲ定メ第二百八條ハ取調ニ付テノ規則ヲ定メタルマテニシテ總テ檢事ヨリ送致ヲ受ケタル以上ノ手續ナリトス第二百七條ニ於テ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ許シタルハ本條ニ於テ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ノ調直ヲ爲スコトヲ得ルト同一ノ職權ナリトス故ニ調直ヲ許シタルモ其調直ノ結果ニ因リ勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得ヘキハ言テ疑ダサルナリ

二 書類ノ不完全ナルハ之ヲ完全ナラシメ無効ナルハ有効ナラシムルノ處置ヲ爲スハ單リ檢事ヨリ送致ヲ受ケタル事件ノミナラス豫審判事自ラ作りタル書類ニ付テモ亦同シ故ニ其調査ヲ爲スコトヲ得ル

○當然ナル可シ蓋シ檢事若クハ司法警察官ノ作りタル書類ニテモ豫審判事ノ作りタル書類ト同シク公正ノ證書タルノ効力ニ付テハ毫モ差異アルコトナル可シト雖モ宣誓ヲ用フルコトヲ得ルト得サルトニ因リ證人又ハ鑑定人ノ申立ノ効力ニ付テハ固ヨリ差異ナシトセス

三 檢事又ハ司法警察官ノ作りタル書類ト雖モ豫審判事ノ作りタル書類ト其効力ノ差異ナキハ第二百八十四條ニ於テ之ヲ規定セリ故ニ豫審判事調直ヲ爲シタリト雖モ是等ノ書類ヲ訴訟書類ニ添置キ後日公判判事ノ心證ニ供スルハ最モ必要ナル可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁

判所ニ呼出スヲ得

○檢事現行犯ノ輕罪ヲ直ニ公判ニ付スルノ手續

- 一 急速ノ處分ヲ要スル間ハ現行非現行ノ手續ニ差異アリト雖モ其處分ヲ終リタル後ハ總テ手續ニ差異アルコトナシ故ニ現行犯ノ輕罪ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ豫審ヲ求メスシテ直ニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得
- 二 檢事既ニ豫審ノ一部ニ着手シタリト雖モ豫審終結ノ言渡ヲ用ヒスシテ直ニ公判ニ付スルコトヲ得故ニ本條勾留狀ヲ發シタルト否トモ拘ハラサルノ明文アリ即チ例外ナリトス
- 三 被告人ヲ逮捕セスト雖モ直ニ公判ニ付スルコト能ハサルニ非ス故ニ本條被告人ヲ訊問シタル後トアル法文ニ拘泥ス可カラズ

第九節 保釋

○保釋ノ解

- 一 被告人ヲ無罪視スルキハ其身體ヲ拘束ス可カラス身體ヲ拘束スルコトナキキハ保釋ヲ求ムルノ理ナシ然レモ其身體ヲ拘束スルハ懲罰ニ非ス懲罰ニ非サルコト因リ保釋ヲ許ス
- 二 未決中身體ヲ拘束スルハ被告人ヲ有罪視スルニ非ス故ニ保釋ヲ許スハ亦被告人ヲ無罪視スルニ因ルニ非ス最初ヨリ無罪視ス可キ者ニシテ未決處分ノ如何ヲ以テ之ヲ區別スルノ理ナカル可シ
- 三 未決中被告人ノ身體ヲ拘束スルハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニシテ且己ムヲ得サルノ處分ナリトス其原由タル第一被告人逃亡ノ恐アルコト第二被告人罪證ヲ湮滅スルノ恐アルコト第三被告人他罪ヲ犯スノ恐アルコト第四被告人定マリタル住所ヲ有セサルコト等ニ因ル
- 四 保釋ノ許否保證金ノ多寡ヲ定ムルハ豫審判事ノ判定ニ任ズ然レモ之ヲ判定スルハ必スモ罪證ノ輕重厚薄ニ拘ハルコトナシ何トナレ

ハ未決中罪證ノ輕重厚薄ヲ以テ被告人ヲ有罪視シ又ハ無罪視スル
ハ法律ノ許サ、ル所ナリ

五 保釋ハ保證金ヲ要ス責付ハ之ヲ要セス保釋ハ被告人ノ請求ヲ要ス
責付ハ之ヲ要セス保釋ハ何時ニテモ出廷ス可キノ證書ヲ要ス責付
ハ之ヲ要セス故ニ保釋ト責付トハ相似テ相非ナルモノトス

六 保釋ノ題目ハ豫審ノ章ニ編入セリ然レモ豫審ニテ送付ノ言渡アリ
タルモハ其送付ヲ受ク可キ裁判所ニ保釋ヲ求メ故障控訴アリタル
モハ其故障又ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ保釋ヲ求メ上告中ハ原裁
判所ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得ヘシ而シテ其規則ハ總テ本節ニ從フ

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケ
タル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ
呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許ス

コトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムル
コトヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報
知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷
ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許ス
ノ言渡書ニ記載ス可シ

○保釋ヲ求メ及ヒ之ヲ許スノ手續

一 被告人ヨリ治罪法ノ規則ニ從ヒ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可ク

且金圓ヲ以テ出廷ヲ保證ス可キノ證書ヲ判事充クテ書記局ニ差出
 ス可シ若シ他人ヨリ保證金ヲ納ム可キキハ其旨ヲ記載シ連署捺印
 ス可シ被告人無能力ナリト雖モ刑事ニ付テハ總テ自ラ其權利ヲ行
 フコトヲ得ルハ第九十八條ニ於テ之ヲ説明セリ第二百十條第二項モ
 亦同條ノ旨趣ヲ重復スルコト過キス然レモ第九十八條ニハ法律上ノ
 代人ノ無能力者ノ爲メ告訴スルコトヲ許シ第二百十條ニハ法律上
 ノ代人及ヒ親屬ヨリモ亦保釋ヲ求ムルコトヲ許セリ蓋シ保釋ハ告訴
 コ於ケル濫訴ノ如キ弊アラサルヲ以テナリ

二 判事保釋證書ヲ受取りタルキハ保釋ノ許否及ヒ保證金ノ多寡ニ付
 キ檢事ノ意見ヲ聽キ保釋ヲ許否スルノ言渡ヲ爲ス可シ但保釋ヲ許
 スノ言渡書ニハ保證ノ金額ヲ記載スルヲ以テ檢事ハ其金額又ハ金
 額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出シタル後ニ非サレハ保釋ノ執行ヲ爲ス
 可カラス

三 第二百十一條第二項ハ第一項ト連續ス可キ規則ニ非ス第二百十四

條第一項ニ置クヲ至當ナリトス且該項ニ報知ヲ爲ス可シトアルハ
 呼出狀ヲ發スルコトニ改正セサル可カラヌ何トナレハ報知書ハ尋常
 通知ニ止ルモノニシテ呼出ノ法式猶豫ノ期限等一定ノ規則アルニ
 非ス且其呼出ニ應セサルモ別段制裁アルコトナシ故ニ檢事又ハ司法
 警察官ト雖モ常ニ之ヲ發スルコトヲ得然ルニ保釋中被告人ヲ呼出ス
 ハ第一節ニ定メタル召喚狀ヲ發ス可キニ非スト雖モ出廷ニ付テハ
 二十四時ノ猶豫アルニ因リ其送達モ亦通常ノ法式ニ從ハサル可カ
 ラス否サレハ被告人ノ出廷セサルニ因リ保證金ヲ沒入スルハ頗ル
 手續ノ疎漏ナルヲ免ノス

保釋ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ者

- 一 勾留狀又ハ収監狀ノ執行ヲ受ケタル被告人
- 二 勾留狀又ハ収監狀ノ執行ヲ受ケタリト雖モ重罪裁判所ニ送付スル

- 言渡ヲ受ケサル被告人
- 三 重罪裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ受ケタリト雖モ輕罪ノ刑ニ該ル可キ被告人
- 四 何レノ場合ニ於テモ被告人無能力ナルキハ其親屬及ヒ法律上ノ代人

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ

保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

○金圓ヲ以テ出廷ノ保證ヲ爲スノ方法

一 現金ヲ差出スヲ但保釋ノ言渡消滅シタルキハ保證金没入ノ言渡ア

リタル場合ヲ除クノ外通貨ヲ以テ元金ヲ還付ス

二 貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ差出スヲ但是等ノ預証書ヲ差出スハ

差出人ニテ息金ヲ損セサル而已ナラス官署ノ手數ヲ省キ最モ法律ノ好ム可キ方法ナリトス

三 資力アル者ノ保證書ヲ差出スヲ但資力ノ有無ハ必スシモ動産不動

産ニ拘ハルヲナカル可シ其有無ヲ判定スルハ裁判官ノ推測ニ任ス然レモ裁判官ハ皮想ヲ以テ其推測ヲ定ムルヲ能ハス必ス戸長又ハ隣佑ニ聞合ヲ爲ス等ノ手數ヲ要スルヲアル可シ

○保證ヲ爲ス可キ者

一 現金若クハ預證書ヲ以テ保證ヲ爲スハ被告人其他裁判所ノ管轄地内ニ住スルト否トニ拘ハラス何人ニテモ之ヲ爲スヲ得

二 保證書ヲ以テ保證ヲ爲スハ必ス其裁判所ノ管轄地内ニ住スル者ニ限リ否サレハ其資力ノ有無ヲ判然スル能ハサル而已ナラス保證金

ヲ没入スルニ當リ無益ノ手數ヲ要セサル可カラズ
第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由有ク

シテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ

豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵取

ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ

言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ

檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

○保釋ノ言渡ヲ取消ス可キ場合

一 被告人逃亡又ハ潜匿シタル時但保證金ヲ没入ス

二 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時但保證金ノ全

部又ハ幾分ヲ没入ス

三 判事保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルノ推測アル時但保証

金ヲ還付ス

四 重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ重罪裁判所ニ還付スルノ言渡アリタ

ル時但保證金ヲ還付ス

○保釋ノ言渡ヲ取消ス可キ第一第二ノ場合ノ手續

一 被告人逃亡又ハ潜匿シタル確証アルハ別段呼出狀ヲ發スルコ及

ハス直ニ勾引狀ヲ發スルコヲ得

- 二 被告人呼出狀ヲ受ケ豫メ正當ノ事由ヲ申立テヌシテ出廷セサル時モ亦勾引狀ヲ發スルヲ得
- 三 保證金ヲ沒入スルハ被告人ヲ引致シタル上ニテ之ヲ言渡シ又被告人ヲ引致スルヲ能ハサルハ闕席ノ儘ニテ之ヲ言渡スヲ得何レノ場合ニ於テモ檢事ノ意見ヲ聽カサル可カラズ
- 四 保証トシテ現金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ預置キタルハ沒入ノ手數タル甚ク容易ナル可シ然レモ資力アル他人ノ保証ニ係ルハ檢事ヨリ保証人ヲシテ其金額ヲ差出サシム可シ若シ之ヲ差出ササルハ通常民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ訟求シ身代限ノ處分ニ至ルヲアル可シ

○保釋ノ言渡ヲ取消ス可キ第一第二ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發スルヲ得ヘキ理由

- 一 被告人逃亡潛匿又ハ單ニ呼出ニ應セサルヲアリト雖モ未ダ勾留狀又ハ収監狀ノ効力消滅セサルニ因リ別段勾引狀ヲ發ス可カラストノ說アリ然レモ令狀ナクシテ被告人ヲ逮捕スルヲ得ス而シテ前ニ發シタル勾留狀又ハ収監狀ハ其効力未ダ消滅セスト雖モ既ニ其執行ヲ遂ケタルニ因リ復之ヲ用フルヲ能ハサル可シ
- 二 第二百二十三條ノ場合ニ於テハ勾留狀ヲ發シタル後最前發シタル勾引狀ヲ用フルヲアリト雖モ此場合ハ假ニ勾留シタル而已ニテ未ダ勾引狀ノ執行ヲ遂ケタルニ非ス其効力モ亦未ダ消滅シタルニ非ス故ニ此例ニ依ル可カラズ

○保釋ノ言渡ヲ取消ス可キ第三第四ノ場合ノ手續

- 一 判事保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスルノ推測アルハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ取消ノ言渡ヲ爲ス可シ此場合ニ於テハ被告人ニ對シ別段呼出狀ヲ發スルヲ要セス檢事ヨリ巡查ヲシテ其言

渡書ヲ被告人ニ送達シ直ニ其執行ヲ爲サシム可シ
 二 重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ重罪裁判所ニ送付スルノ言渡アリタ
 ルハ檢事ノ意見ヲ聽クヲ要セス直ニ保釋又ハ責付ヲ取消スノ言
 渡ヲ爲ス可シ但其言渡ハ送付ノ言渡書ニ附記スルヲ以テ足レリト
 ス此場合ニ於テモ檢事ヨリ送付ノ言渡書ヲ送達シ直ニ之ヲ執行ス
 可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言

渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪
 ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ
 意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移ス
 ノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移

スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保
 證金ヲ還付ス可シ

○没入ニ係ル保證金ヲ還付ス可キ場合

一 豫審ニ於テ没入ニ係ル保證金ヲ還付スルハ第二百十七條ノ場合は
 ナリ此場合ニ於テハ其旨ヲ終結ノ言渡書ニ記載ス可シ同條ニハ檢
 事ノ意見ヲ聽ク可キヲ定ム然レモ豫審終結ノ言渡ヲ爲スニ付キ
 檢事ノ意見ヲ聽キタル以上ナレハ更ニ没入ニ係ル保證金ヲ還付ス
 ルニ付キ其意見ヲ聽クニ及ハサル可シ何トナレハ同條ノ言渡ヲ爲
 シタル場合ニ於テハ法律ニ於テ必ス其金額ヲ還付ス可キヲ定ム
 ルヲ以テ檢事ニテモ之ヲ還付ス可シトスルノ外意見ヲ述フルヲ能
 ハサル可シ故ニ第二百十八條ノ場合ニ於テハ別段檢事ノ意見ヲ聽
 ク可キノ明文アルコトナシ

二 公判ニ於テ没入ニ係ル保証金ヲ還付スルハ無罪又ハ免訴ノ言渡若クハ違警罪ノ刑又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ノ刑ノ言渡アリタル場合はナリ

○通常保証金ヲ還付ス可キ場合

一 豫審ニ於テ通常保証金ヲ還付スルハ第二百十八條ノ場合はナリ
二 公判ニ於テ通常保証金ヲ還付スルハ無罪又ハ免訴ノ言渡違警罪ノ刑又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ノ刑ノ言渡若クハ保釋ヲ取消スノ言渡アリタル場合はナリ

○保証金ヲ還付スルノ理由

一 通常保証金ヲ還付ス可キ場合ハ既ニ保釋ノ言渡消滅シタルニ因リ保証金ヲ還付スルハ當然ナル可シ
二 没入ニ係ル保証金ヲ還付ス可キ場合ハ保証金ヲ没入シタルニ因リ

保釋ノ言渡消滅スルモノナレハ被告人官命ニ抗スルノ責ナキコト非
ス故ニ通常保釋ノ言渡消滅シタル場合ト同視ス可カラサルニ似タ
リ然レモ禁錮以上ノ刑ニ該ラサル者ナレハ其官命ニ抗スルノ理由
モ亦全ク官ノ錯誤ヨリ生シタルノ外ナラス官ノ錯誤ヨリ生シタル
所爲ヲ責ムルハ法律ノ忍ヒサル所ナル可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハ

ス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

○責付ノ解

一 責付ハ從來ノ慣例ニシテ唯其名義ヲ存スルニ過キス何トナレハ被
告人ノ親屬又ハ故舊看守ヲ怠リ若クハ被告人ノ逃匿又ハ潜匿スル
ニテアル別段制裁アルコトナシ

二 責付ハ保證金ヲ納メサル保釋ト看做スヲ得然レモ勾留狀又ハ収監狀ノ効力消滅シタル場合ト雖モ亦之ヲ言渡スヲ無キニ非ス故ニ法律ニ明文ナシト雖モ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キハ未ダ勾留狀又ハ収監狀ヲ受ケサル被告人ニ付テモ亦責付ノ言渡ヲ爲スヲ得ヘシ

第十節 豫審終結

○終結ノ解

一 豫審ニ於テ公訴ノ起點ヲ起訴ノ處分トシ公訴ノ結點ニ終結ノ言渡トス其言渡ニ因リ或ハ公訴ノ繼續スルヲアリ或ハ公訴ノ繼續セサルヲアリ何レノ場合ニ於テモ其豫審判事ノ關係ヲ離脱シタルモノトス

二 豫審終結ノ言渡アリタルハ其豫審ヲ爲シタル判事ノ關係ヲ離脱

スト雖モ其言渡確定スルニ非サレハ豫審ヲ離脱シタルニ非ス加之假令言渡確定シタリト雖モ管轄違ノ言渡アリタル場合又ハ第二百六十一條第三百六十一條第三百六十九條ノ場合ノ如キハ更ニ豫審ヲ爲スヲアル可シ

○終結ノ効力

一 送付ノ言渡ハ其送付ヲ受ク可キ裁判所ヲシテ被告事件ヲ受理セシム可キノ効力ヲ有ス

二 免訴ノ言渡ハ第二百六十一條ニ從ヒ新ナル證據アルニ非サレハ公訴ヲ繼續セシメサルノ効力ヲ有ス

三 管轄違ノ言渡ハ告アリテ理セサルノ効力ヲ有ス

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル時ハ豫審終結

少處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

○豫審終結ノ思料ヲ定ム可キ場合

一 被告事件其管轄ニ非サルヲ但管轄ニ非サルキハ第一百十六條ノ場合ノ如ク急速ヲ要スル事件ヲ除クノ外豫審ノ手續無効ニ屬ス可キヲ以テ別段被告事件ニ付キ取調ヲ爲スヲ要セス直ニ管轄違ノ言渡ヲ爲サ、ル可カラス

二 被告事件ニ付キ公訴消滅シタルヲ但公訴消滅シタルハ其消滅シタル理由ヲ除クノ外強テ取調ヲ爲スモ無益ノ手数ノミナラス既ニ消滅シタル事件ヲ探亂スルハ法律ノ好マサル所ナリ告訴ヲ要スル事件ノ如ク公訴ヲ停止セラレタルヲ付テモ亦同シ

三 被告事件他ニ取調フ可キ廉ナキヲ但本條ニ明文ナシト雖モ第二ノ思料ヲ以テ第三ノ思料ニ包含シタルモノト爲ス可カラヌ若シ之ヲ包含シタルモノトセハ第一ノ思料ヲモ亦包含シタルモノトシテ本文ニ掲載スルニ及ハサル可シ抑モ他ニ取調フ可キ廉ナシトハ豫審ノ處分完全シテ本案及ヒ附帶ノ事件ニ付キ取調ノ遺漏ナキヲ謂フ管轄ニ非サルヲ及ヒ公訴消滅シタルヲハ附帶ノ事件ノ取調ニ止リ

本案ノ事件ノ取調ヲ要セサルモノトス故ニ豫審終結ノ思料ニ付テハ三箇ノ區別ヲ爲サ、ル可カラス

○豫審判事被告事件ヲ審定スルノ順序

一 第一其管轄タルヲ審定シ第二公訴受理ス可キヲ審定シ第三犯罪ノ性質及ヒ其犯罪ヲ罰ス可キ法文ヲ審定シ第四被告事件罪ト爲ル可キ性質ヲ具備スルヲ審定シ第五罪ノ性質ヲ審定スルニ當リ

精神錯亂強迫抗拒ス可カラサル勢力正當防禦及ヒ盜罪ノ被告人ニ付テハ被害者ノ親屬ナルコト等總テ罪ノ性質ヲ消滅セシム可キ原由アルコトヲ審定ス可シ

二 全ク罪ヲ消滅スルニ非シテ刑ヲ輕減ス可キコトヲ審定スルハ單リ公判判事ノ權内ニ屬スルモノトス豫審判事ハ唯言渡書ニ其模様ヲ記載スルマテニテ判決ノ基礎ト爲スヲ得ス然レモ重罪ニ該ル可キ事件減輕シテ輕罪ニ該ル可キハ送付ス可キ裁判所ノ異ナルヲ以テ宥恕減輕及ヒ自首減輕ノ模様ヲモ審定セサル可カラズ此場合ト雖モ酌量減輕ノ模様ハ之ヲ審定スルコトヲ得ス

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シニ

十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

○檢事終結ノ意見ヲ付スルノ手續

一 前條ニ從ヒ檢事訴訟書類ヲ受取リタルヨリ三日内ニ終結ノ意見ヲ付シ之ヲ豫審判事ニ還付セサル可カラズ然レモ其訴訟書類ヲ檢閱シ仍ホ取調ノ盡サルコトアルハ訴訟書類ヲ還付シ更ニ臨時ノ請求ヲ爲スコトヲ得

二 豫審判事更ニ取調ヲ要セスト思料シタルハ臨時ノ請求ニ應スルコトヲ復ヒ訴訟書類ヲ檢事ニ送致ス可シ此場合ニ於テハ檢事其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ終結ノ意見ヲ付シ之ヲ還付ス可シ若シ二十四時ヲ經過スルモ最初訴訟書類ヲ受取リタルヨリ三日ヲ經過セサルハ其期限マテニ之ヲ還付スルコトヲ得ルハ當然ナリ

三 豫審判事臨時ノ請求ニ應シ更ニ取調ヲ爲シタルハ總テ最初ノ手

三 續ニ復ス即チ豫審判事ハ更ニ前條ニ從ヒ檢事ニ終結ノ意見ヲ求メ
檢事ハ意見ヲ付スル爲メ更ニ三日ノ期限ヲ有ス

○檢事終結ノ意見ヲ付スルヲ能ハス又ハ期限内ニ訴訟書
類ヲ還付スルヲ怠リタル場合ノ手續

- 一 檢事ハ豫審判事更ニ取調ヲ爲スヲ肯セス又ハ取調ヲ爲シタリト
雖モ其意見ヲ満足セシムヲ能ハサルハ必スシテ第二百二十三條
以下ニ定メタル所ニ從ヒ意見ヲ付スルニ及ハス云々ノ取調充分ナ
ラサルニ因リ意見ヲ付スル能ハサルヲ以テ終結ノ意見ト爲スチ
得ヘシ此場合ニ於テハ終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ免カレサ
ル可シ
- 二 檢事終結ノ意見ヲ付シ訴訟書類ヲ期限内ニ還付スルヲ怠リタル
ハ豫審判事ヨリ之ヲ督促シ且時宜ニ依リ上官ヨリ懲戒ヲ受クル
コトアル可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハ

ス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

○判事ノ判決ハ檢事ノ意見ニ拘ハラサルノ辭

- 一 裁判官ハ法律ヲ以テ長官トス故ニ法律ノ命スル所ニ非サレハ其思
料ヲ拘束セラル、コトナル可シ即チ豫審ヲ終結スルニハ後ニ定メ
タル規則ニ從ヒ其言渡ヲ爲サ、ル可カラスト雖モ檢事ノ意見ニ從
フコトヲ要セサルナリ
- 二 裁判官ノ判決ヲ爲スニ必スシモ檢事ノ意見ニ從フコトヲ要セサルハ
言ヲ竣タス然レモ檢事ノ意見書ニ如何ナル言渡ヲ請求スルコトヲ記
載セス又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ記載シタルハ或ハ疑惑ヲ
生スルコトナシトセス公判ニ付テモ第三百一條ニ本條ト同一ノ規則
ヲ掲載セリ亦以テ立法官ノ注意スル所ヲ見ルニ足レリ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ
ヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者
ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀
ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

○管轄違ノ言渡

- 一 管轄裁判所ニ付テハ第五條ニ於テ説明セリ然レモ犯罪ノ種類ノミ
ニ付テハ豫審ニ於テ管轄違ノ言渡ヲ爲スコトナカル可シ何トナレハ
重罪輕罪ハ共ニ豫審判事ノ管轄ナリ違警罪ハ直ニ相當ノ裁判所ニ
送付スルノ言渡ヲ爲スコト得ヘシ
- 二 共犯罪ノ管轄附帶犯罪ノ管轄俱發犯罪ノ管轄ニ付テハ直ニ管轄違
ノ言渡ヲ爲ス可カラサルコトアリ一例ヲ示サン第一共犯罪ノ管轄管
ヘハ豫審中高等法院ニ於テ裁判ス可キ者ノ共犯ナルコトヲ發見シタ

リト雖モ現ニ開院中ニ非ス且開院中ト雖モ同院ノ照會ニ因リ檢察
官ノ請求アルニ非サレハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可及ハス第二附帶犯
罪ノ管轄管ヘハ數人通謀シ日時場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル場合
等ニ於テ犯罪ノ地ノ管轄相異ナルトハ彼是ノ裁判所ニ於テ訴訟并
起タル場合ノミ豫審又ハ公判ニ着手シタル前後ヲ詳ニシ管轄違ヲ
言渡ス可シ第二俱發犯罪ノ管轄管ヘハ數罪ヲ犯シ犯罪ノ地ノ管轄
ヲ異ニシ彼是ノ裁判所ニ於テ訴訟并起リタルト雖モ被告人ヲ逮捕
シタル地ノ裁判所ニ於テ彼是ノ管轄地ニ屬スル犯罪ニ着手シタル
コトヲ詳ニスルニ非サレハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可及ハス

三 管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ唯自己ノ管轄ニ非カルコトヲ言渡ス而已ニテ
管轄裁判官ヲ指定スルノ權ナシ然レモ第百十六條ノ場合ニ於テハ
管轄違ノ言渡ヲ爲サスレテ管轄豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲サ
ル可カラズ此場合ノ如キハ豫審終結ノ一種ナルヲ以テ別段本節

○掲載スルヲ必要トス

○勾留ヲ要ス可キ者ニ付テノ處分

- 一 管轄違ノ事件ニ付テハ管轄官吏ノ囑託ヲ受クルニ非サレハ之ニ着手スルヲ得ス若シ着手シタルハ之ヲ拋棄セサル可カラズ然レモ公訴既ニ起リタル以上ハ管轄違ノ言渡ヲ爲サル可カラス
- 二 管轄違ノ事件ト雖モ急速ヲ要スル處分ハ之ヲ爲スヲ得即チ第一百十六條ノ場合ニ於テモ亦同シ畢竟管轄ニ非サル被告人ヲ勾留スルハ一時已ムヲ得サルノ處分ナリトス
- 三 其事件ヲ檢事ニ交付スルハ檢事ヲシテ料理セシムル爲メナリトス故ニ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發ス可キ場合ハ被告人ヲ檢事ニ交付スルニ付キ被告人ハ總テ其指揮ニ從フ可キ旨ヲ管轄違ノ言渡書ニ記載スルヲ要ス

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡

ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

- 一 犯罪ノ證據充分ナラサル時
 - 二 被告事件罪ト爲ラサル時
 - 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 - 四 確定裁判ヲ經タル時
 - 五 大赦アリタル時
 - 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時
- 本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス

○免訴ノ言渡

一 被告事件アラサルコ即チ犯罪ノ證據ナキ事件犯罪ノ證據ナキニ非
スト雖モ充分ナラサル事件又ハ無罪ナリトノ確定裁判ヲ經タル事
件是ナリ

二 被告事件判然ナリト雖モ法律ニ於テ之ヲ問ハサルコ即チ罪トナラ
ス若クハ罪ト爲ル可キモノト雖モ法律ニ於テ之ヲ全免ス可キ事件
又ハ有罪ナリトノ確定裁判ヲ經タル事件是ナリ

三 被告事件ノ有無ニ拘ハラス其取調ヲ爲ス可カラサルコ即チ期滿免
除又ハ大赦アリタル事件是ナリ

○免訴ノ言渡アリタル場合ニ於テ私訴ニ付テノ結局

一 本條第一第二第三及ヒ無罪ナリトノ確定裁判ヲ經タル場合ハ私訴
ニ非スシテ通常ノ民事ナリトス故ニ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ
訴ヲ爲スコトヲ得サルハ當然ナリ

二 本條第五第六及ヒ有罪ナリトノ確定裁判ヲ經タル場合ハ私訴ナリ

ト雖モ公訴ニ附帶スルコト能ハサルヲ以テ民事裁判所ニ非サレハ要
償ノ訴ヲ爲スコトヲ得サルハ亦當然ナル可シ

三 末項ノ文義ニテハ未ダ私訴ノ申立ナキ場合ニノミ適用ス可キ規則

ニ似タリ然レド既ニ豫審判事ニ私訴ノ申立ヲ爲シ一旦受理セラレ
タル場合ト雖モ免訴ノ言渡アリタルハ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ
爲サ、ルヲ得ス公判ニ於テ無罪又ハ免訴ノ言渡アリタル場合ト同
視ス可カラス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ

違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケ
タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕

罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ
者ハ思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ
禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又
責付ヲ爲スヲ得
若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ
得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重
罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ
責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ
重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指
揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留

置ス可キヲ記載ス可シ

○被告事件ヲ送付スルノ言渡

- 一 被告事件違警罪ナルモハ管轄違ノ言渡ヲ爲サスシテ相當ノ裁判所
ニ送付スルノ言渡ヲ爲スハ違警罪ニ付キ豫審判事ノ言渡ノ効力ヲ
擴張シタルモノトス何トナレハ管轄違ノ言渡ニテハ未タ何レノ裁
判官モ其事件ヲ受理シタルモノニ非ス然レモ送付ノ言渡アリタル
モハ送付ヲ受ク可キ裁判官ヲシテ既ニ其事件ヲ受理セシメタルモ
ノト看做スヲ得ヘシ
- 二 違警罪裁判所ニ送付スルノ言渡及ヒ罰金ノ刑ニ該ル事件ニ付キ輕
罪裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲スモハ釋放ノ言渡ヲモ爲ス可シ但
釋放ノ言渡ハ送付スル言渡書ニ附記スルヲ以テ足レリトス
- 三 禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ輕罪裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲

スキハ保釋ヲ許シ責付ヲ爲シ又ハ新ニ令狀ヲ發スルヲ得但責付ノ言渡ハ送付ノ言渡書ニ附記スルヲ得ヘシ

四 重罪裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲スキハ法律ニ於テ被告人ニ身体ノ自由ヲ與フ可カラサルノ推測アルニ因リ直ニ監禁ノ處分ヲ爲サ、ル可カラス若シ保釋中又ハ責付中ナルキハ其言渡ヲ取消シ第二百六十條第二項ニ從ヒ控訴裁判所檢事長ヨリ輕罪裁判所檢事ニ書類証憑及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キノ指揮アルマテ輕罪裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可シ但保釋責付ヲ取消スノ言渡及ヒ檢事長ノ指揮アルマテ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ハ送付ノ言渡書ニ附記ス可シ

五 監禁ヲ要スル事件ニ付キ送付ノ言渡アリタルキハ勾留狀ヲ受ケタル被告人ニ付テハ収監狀ニ換ヘ勾留狀ヲ受ケサル被告人ニ付テハ新ニ収監狀ヲ發スルヲ要ス何トナレハ豫審終結ノ言渡アリタル

以上ハ勾留狀ノ制限ニ從フ能ハサルヲ有リ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依

リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其理由又犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模様證憑ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ

從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

○豫審終結ノ言渡ニ付ス可キ理由

一 事實ニ依リ理由ヲ付スルハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可キハ被告人ノ罪ヲ犯シタルハ其管轄地外ナル云々ノ場所ナルヲ又ハ被告人ノ身分ハ軍人ナルヲ等々明示シ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キハ被告事件罪ト爲ラサルヲ又ハ犯罪ノ証憑充分ナラサルヲ等々明示シ送付ノ言渡ヲ爲ス可キハ犯罪ノ性質摸樣証憑ノ充分ナルヲ明示スルヲ謂フ第二百二十八條第三項ニ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其理由トアリ即チ何年月日何裁判所ニ於テ確定裁判ヲ經タルヲ又ハ大赦アリタルヲ若クハ其被告事件ハ何年以前ニアリタルヲナルヲ以テ期滿免除アリタルヲ等々明示スルヲ謂フ

二 法律ニ依リ理由ヲ付スルハ管轄違及ヒ免訴ノ言渡ニ付テハ事實ノ

理由中ニ包含スルヲ以テ法律ニ於テモ別段正條ヲ掲載スルヲ命セズ然レモ之ヲ掲載スルハ決シテ法律ノ厭フ所ニ非サルナリ但管轄違ノ言渡ニ付テハ正條ヲ掲載スルコト少シク穩當ナラサルヲアリ何トナシハ法律ニ於テ云々ノ事件ニ付テハ管轄違ナリトノ箇條アリルヲナシ故ニ云々ノ事件ハ云々ノ裁判所ノ管轄ナリトノ箇條ヲ掲載シテ其管轄ニ非サルヲ明示スルヲ要ス免訴ノ言渡ヲ爲スニハ第二百二十四條ヲ掲載シ送付ノ言渡ヲ爲スニハ其罪ヲ罰ス可キ法律ニ正條ヲ掲載スルヲ要ス

○豫審終結ノ言渡書ノ記載法

一 管轄違ノ言渡書ニ付テハ第一被告人ノ氏名職業住所身分年齢第二被告事件第三管轄違ノ事由及ヒ管轄ヲ定ムル法律ノ正條第四檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ第五管轄違ヲ言渡スルヲ第六第二百二十三條

ニ從ヒ前ニ發シタル令狀ヲ存スルキハ其事由ヲ記載ス可シ若シ同
條ニ從ヒ新ニ被告人ヲ勾留ス可キヲ要スルキハ其事由ヲ言渡書
ニ記載シ又ハ別段令狀ヲ發スルモ妨ケナカル可シ第七言渡ヲ爲シ
タル年月日ヲ記載シ裁判所ノ印ヲ捺シ及ヒ豫審判事書記ノ署名捺
印アルヲ要ス

二 免訴ノ言渡書ニ付テハ第一被告人ノ氏名職業住所身分年齢第二被
告事件第三免訴ノ事由及ヒ法律ノ正條第四檢察官ノ意見ヲ聽キタ
ルヲ第五被告人勾留ヲ受ケタルキハ之ヲ放免スルヲ第六免訴ヲ言
渡スヲ第七言渡ヲ爲シタル年月日ヲ記載シ裁判所ノ印ヲ捺シ及ヒ
豫審判事書記ノ署名捺印アルヲ要ス

三 送付ノ言渡ニ付テハ第一被告人ノ氏名職業住所身分年齢第二被告
事件第三犯罪ノ性質ハ云々第四犯罪ノ模様ハ云々第五犯罪ノ證據
ハ豫審手續ニ因リ送付ノ言渡ヲ爲スニ充分ナルヲ第六其事件ハ刑

法第何條ニ該ル可キヲ及ヒ其餘ノ全文第七檢察官ノ意見ヲ聽キタ
ルヲ第八違警罪輕罪又ハ重罪ノ裁判所ニ送付スルヲ第九其言渡ニ
對シテハ治罪法第二百四十六條ノ規則ニ從ヒ故障ヲ爲スヲ得ヘキ
ヲ及ヒ故障ヲ爲スニハ言渡書ノ送達アリタルヨリ一日内ニ其申立
ヲ爲ス可キヲ記載ス可シ第十言渡ヲ爲シタル年月日ヲ記載シ裁
判所ノ印ヲ捺シ及ヒ豫審判事書記ノ署名捺印アルヲ要ス第十一違
警罪裁判所ニ送付スルノ言渡書ニハ被告人勾留ヲ受ケタルキハ之
ヲ釋放ス可キヲ記載ス可シ第十二輕罪裁判所ニ送付スルノ言渡
書ニハ罰金ノ刑ニ該ル可キ事件ナルキハ被告人ヲ釋放ス可キヲ
記載シ及ヒ責付ス可キキハ別段檢事ノ意見ヲ聽キ其旨ヲ送付ノ言
渡書ニ記載スルヲ得但新ニ勾留ヲ命シ又ハ保釋ノ願ヲ許否シ若
クハ既ニ許シタル保釋ヲ取消スヲ送付ノ言渡書ニ附記スルヲ得
得サルニ非スト雖モ頗ル繁雜ヲ免カレサルニ因リ別段命令又ハ言

渡ヲ爲スヲ要ス第十三重罪裁判所ニ送付スルノ言渡書ヨハ被告人未タ身體ノ拘束ヲ受ケサルキハ之ヲ収監スルヲ又ハ保釋中若クハ責付中ナルキハ保釋又ハ責付ノ言渡ヲ取消スヲ及ヒ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ其裁判所ノ監倉ニ留置ス可キヲ記載ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

○豫審終結ノ言渡書ノ送達及ヒ執行

一 豫審ハ密行ナルヲ以テ訟廷ニ於テ言渡ヲ爲スヲナク總テ言渡書ヲ送達スルニ止ル其法式ハ第二十二條以下ニ定メタル規則ニ從ヒ言渡書ノ謄本ニ送達書ニ通テ添へ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム但檢事

ニ送達ヲ爲スハ通常官署ノ書類往復ノ規程ニ從フ

二 第二百五十條ニ豫審終結ノ言渡ト雖モ被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ之ヲ停止セサルノ明文アリ此場合ニ於テハ檢事直ニ其言渡ヲ執行ス可キヲ以テ巡查ヲシテ言渡書ヲ帶行セシメサルヲ得ス故ニ被告人ヨハ書記ヨリ別段送達ヲ爲スコ及ハサル可シ

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人

ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

○豫審ノ不在裁判

一 豫審ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ニ付テモ亦不在裁判ヲ爲サ、ルニ非ス然レモ罰金ノ刑ニ該ル而已ニテハ豫審中必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セス且豫審ノ言渡ハ其言渡書ヲ送達スルニ止ルヲ以テ出廷ヲ要セサル被告人ノ不在ナリヤ否ヲ知ルハ別段必要ナルヲニ非ス故ニ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト均シシ其不在ナルヲ言渡書ニ記載スルニ及ハス

二 豫審ニ於テ不在裁判ヲ爲スハ公判ニ於テ缺席裁判ヲ爲スト同一ノ主義ニシテ公訴私訴ノ落着ヲ要スルニ在リ故ニ被告人ヲシテ速ニ捕ニ就カシメ及ヒ民事原告人ノ要求ヲ満足セシムルノ處分ヲ爲スハ法律ノ注意スル所ナリ被告人逃亡又ハ潜匿シテ竊ニ上訴ヲ爲シ

萬一ヲ希望スルカ如キ不當ナル處置ヲ許サス畢竟仮ニ財産差押ヲ爲スモ亦被告人ノ出廷ヲ促カシ及ヒ費用ノ辨償ヲ要スルニ外ナラ

三 豫審ノ不在裁判ハ公判ノ缺席裁判ノ如ク別段上訴ノ期限ヲ猶豫スルヲ無シ蓋シ豫審ニ於テハ對審公行ヲ用ヒス原被ノ証憑ヲ取纏ムルハ全ク裁判官ノ權内ニ屬スルモノトス故ニ被告人ノ陳述ヲ聽カサルモ必スシモ事實ノ取調ヲ盡スト能ハサルニ非ス被告人ハ訊問ヲ受ケスト雖モ自ラ其權利ヲ拋棄シタル者ニシテ事實ヲ盡サハルヲ以テ口實ト爲ストナ得サル可シ

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判

事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ

差出ス可シ

○豫審判事ヨリ裁判所長ニ差出ス可キ豫審ノ既決未決ノ

報告書

- 一 既決事件ノ報告書ハ必スシモ一事件コトニ別段之ヲ作ルニ及ハス本日二件以上終結シタルキハ二件以上同一ノ報告書ニ記載スルヲ得ヘシ然レモ本條ニ速ク云々トアリ必ス故障ノ期限内ニ之ヲ差出スヲ要ス本日終結シタル事件ト翌日終結シタル事件ト同一ノ報告書ニ記載シ同時ニ差出スヲアル可カラス豫審ノ既決事件ハ第六十二條ニ於テ之ヲ説明セリ
- 二 未決事件ノ報告書ハ必ス十五日コトニ之ヲ差出サ、ル可カラス豫審ノ未決事件モ亦第六十二條ニ於テ之ヲ説明セリ

○報告書ノ記載法

- 一 既決事件ノ報告書ハ第一被告人ノ氏名職業住所身分年齢第二被告事件第三犯罪ノ日時場所第四共犯ノ氏名住所第五受理シタル年月日第六終結ノ言渡第七其言渡ヲ爲シタル年月日第八被告人ノ身體取締ノ處分ヲ記載シ豫審判事ノ署名捺印アルヲ要ス
- 二 未決事件ノ報告書ハ第一被告人ノ氏名職業住所第二被告事件第三犯罪ノ日時場所第四受理シタル年月日ヲ記載シ豫審判事ノ署名捺印アルヲ要ス

第四章 豫審上訴

○豫審上訴ノ解

- 一 豫審ニ於テモ亦公判ト均シク始審ノ言渡アリ終審ノ言渡アリ確定ノ言渡アリ第一豫審判事ノ言渡ヲ始審トス第二會議局ノ言渡ヲ終審トス第三大審院ノ言渡ヲ確定トス
- 二 豫審上訴ハ第一豫審判事ノ言渡ニ對スル故障第二會議局ノ言渡ニ

對スル上告ナリトス故ニ豫審中ノ處分ニ對スル故障アリ豫審終結ノ言渡ニ對スル故障アリ豫審中ノ處分ニ對スル故障ハ處分アリタル事件及ヒ故障ヲ爲ス可キ人ニ付テ制限アリ第二百三十四條第二百三十七條ニ定メタル場合はナリ豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ハ言渡シタル事件又ハ處分アリタル事件及ヒ故障ヲ爲ス可キ人ニ付テ制限アリ第二百四十六條ニ定メタル場合はナリ蓋シ豫審中ニ爲スコトヲ得ヘキ故障ト豫審終結ヲ待テ爲スコトヲ得ヘキ故障トヲ規定シタルモノトス上告ハ如何ナル場合ト雖モ豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非カレハ之ヲ許サス蓋シ濫訴ヲ防ク所以ナリ

三 故障ハ事實ノ取調ヲ爲スヲ以テ仍ホ之ヲ密行ス上告ハ法律ノ取調ヲ爲ス而已ナルヲ以テ豫審事件ト雖モ之ヲ公行ス

四 故障ノ判決ハ書類ノ取調ノミニ依ル上告ハ公行スルヲ以テ書類ノ取調ヲ用ヒス原被ノ趣意書及ヒ答辨書ト雖モ別段專任判事ノ口述

ヲ以テ公廷ニ披露ス

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ

- 豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得
 - 一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
 - 二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
 - 三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時
 - 四 越權ノ處分アル時
- 民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

○豫審中ノ處分ニ付キ故障ヲ許シタル場合

- 一 法律ニ背キタル處分ヲ取消スコトヲ肯セサル時
- 二 法律ニ從ヒ請求アリタル處分ヲ履行スルコトヲ肯セサル時

○故障ノ原由ヲ認ムルノ詳

- 一 法律ニ背キタル處分トハ豫審判事爲ス可カラサルヲ爲シタル場合ナルヲ以テ直ニ越權ト認ムルヲ得ヘシ然レモ別段言渡アリタル場合ヲ除クノ外訴訟上ノ利益ノ爲メ一應豫審判事ニ法律ニ背キタル處分ノ取消ヲ申立テ其申立ヲ棄却スルノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可シ
- 二 法律ニ從ヒ請求アリタル處分トハ豫審判事爲ス可キヲ爲サ、ル場合ナリトス然レモ爲ス可キ處分ヲ爲サ、ルヲ以テ直ニ故障ノ原由ト爲ス可カラス一應豫審判事ニ其處分ヲ爲ス可キヲ申立テ其申立ヲ棄却スルヲ以テ越權ト認ムルヲ得ヘシ此場合ニ於テハ其棄却ノ言渡ニ對シ直ニ故障ヲ爲スヲ得
- 三 本條第一第二第三ハ重要ナル條件ヲ枚擧シタル而已ニテ總テ越權ニ非サルハ無シ故ニ其原由ヲ認ムルノ方法ニ付テモ亦同シ唯第一第二第三ノ場合ヲ除クノ外ハ越權タルヲ以テ故障ノ原由ト爲サ

ハル可カラス其越權ナルト否トハ裁判官ノ判決ニ依ル但其判決ヲ爲スニ付テハ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書

記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見

書ニ依リ之ヲ判決ス可シ
會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫
審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヲ得

○故障ニ付テノ事件

- 一 豫審中ノ故障ハ申立書アルヲ要セス蓋シ豫審終結ニ至ルマテ何時
ニテモ故障ヲ爲スヲ許シ別段申立ノ期限ヲ定メサルヲ以テナリ
- 二 故障ニ付テ豫審處分ノ執行ヲ停止セサルハ第一會議局ハ書類裁判
ナルヲ以テ訴訟關係人ノ出頭ヲ要セス故ニ豫審判事處分ヲ繼續ス
ルノ妨碍ト爲ルヲナカル可シ第二豫審中故障アル毎ニ豫審處分ヲ
停止スルキハ訴訟ヲ遷延スルノ恐アルヲ以テナリ然レモ保釋責付
ノ言渡ノミ檢事ノ故障ニ依リ其執行ヲ停止スルハ若シ保釋ス可カ
ラサルヲ保釋シ責付ス可カラサルヲ責付シタル場合ニ於テ被告人

逃亡又ハ潜匿シタルキハ假令會議局ニ於テ其言渡ヲ取消シタリト
雖モ再ヒ被告人ヲ搜索スルニ付キ無益ノ費用ト手續トヲ要スルコ
アル可シ

- 三 故障ヲ其裁判所ニ於テ判決スルハ上訴ノ主義ニ乏シキコ似タリ然
レモ第一故障ハ書類裁判ナルニ因リ上等ノ裁判所ニ於テ取調ヲ爲
サノヨリハ其裁判所ニ於テ取調ヲ爲スハ事實ヲ盡スニ便ナル可シ
第二故障ハ控訴ト均シク判事三名以上ニテ之ヲ判決ス第三判決ヲ
速ニシ冗費ヲ減シ手續ヲ省クニ最モ注意シタルモノトス

- 四 故障ノ書類裁判ナルハ必スシモ便利ノミノ爲メナラス豫審取調ノ
主義ニ基キタルモノトス何トナレバ豫審ノ取調ハ公判ニ付ス可キ
證據ヲ集取スルニ在リ証憑ヲ集取スルハ書類ヲ以テ成立ツモノト
ス豫審判事ノ作りタル書類モ亦一ノ証憑タルニ過キス故ニ故障ノ
判決ヲ爲スニ付テハ書類ノ法式ニ適スルト否ト書類ノ事實ヲ盡ス

- 五 故障ノ申立人又ハ對手人ナルト否トニ拘ハラズ會議局ノ判決ニ干預ス可キ檢察官ハ其裁判所ノ檢事ナリトス故ニ檢事ハ趣意書又ハ答辨書ノ外ニ意見書ヲ差出サ、ル可カラス即チ第二百三十六條第一項ノ法文ヲ以テ其意ヲ了知ス可シ
- 六 豫審中ノ故障ノ判決ハ直ニ之ヲ執行シ終決ノ言渡アリタル後ニ非サレハ上告ヲ許サ、ルハ訴訟ノ紛擾ヲ防シ所以ナリ但其上告ハ別段終結ノ言渡ニ對シ故障ナキモハ法律ニ明文ナシト雖モ終結ノ言渡確定スルマテニ之ヲ申立テ別段終結ノ言渡ニ對シ故障アリタルモハ其判決ニ對スル上告ノ期限内ニ之ヲ申立テサル可カラス

○故障ノ手續

- 一 檢事故障ノ申立人ナルモハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出シ書記局ヨ

- リ其一通ヲ被告人ニ送達シ被告人ハ其送達ヲ受ケタルヨリ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ但趣意書ハ返納スルニ及ハズ書記局ニ於テハ被告人答辨書ヲ差出シタルト否トニ拘ハラズ答辨書ヲ差出ス可キ期限ヲ經過シタル後故障書類ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ更ニ意見書ヲ添へ會議局ノ判決ニ付ス可シ終結ノ言渡ニ對スル故障ニ付キ定メタル第二百五十一條ノ法文ハ實際書類ノ取扱ヲ示シタル迄ニテ書記ヨリ判決ニ付スルモノト誤解ス可カラス
- 二 被告人故障ノ申立人ナルモハ趣意書一通ヲ書記局ニ差出シ書記局ヨリ之ヲ檢事ニ送致ス可シ檢事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ三日内ニ答辨書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ書記局ニ於テハ其一通ヲ被告人ニ送達シ更ニ故障書類ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ意見書ヲ添へ會議局ノ判決ニ付ス可シ
- 三 私訴ニ付テハ被告人ト民事原告人トヲ問ハズ故障ノ申立人ヨリ趣

意書二通ヲ書記局ニ差出シ書記局ヨリ其一通ヲ對手人ニ送達ス可
 シ對手人ハ其送達ヲ受ケタルヨリ三日内ニ答辨書二通ヲ差出ス可
 シ書記局ニ於テハ其一通ヲ對手人ニ送達シ且故障書類ヲ檢事ニ送
 致ス可シ檢事ハ意見書ヲ添ヘ會議局ノ判決ニ付ス可シ
 四 會議局ニ於テハ當該判事三名以上ニテ故障書類ヲ審閱ス可シ但其
 言渡ヲ爲スニ付テハ第二百五十二條以下ノ規則ニ從フ

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原

- 告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヲ得
- 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者
ノ配偶者ト親屬ナル時
- 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
- 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ

是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ
 若クハ聽許シタル時

○忌避及ヒ回避

- 一 忌避ハ訴訟關係人ヨリ當該裁判官ヲシテ其訴訟ニ干預セシムルコ
ト拒ミ回避ハ當該裁判官自ラ其訴訟ニ干預スルコトヲ拒ムヲ謂フ蓋
シ忌避ハ裁判官ニ付キ嫌疑アル爲メニシテ回避ハ裁判官自ラ其嫌
疑ヲ免ル、爲メナリトス故ニ忌避ハ一箇ノ訴訟ナリト雖モ回避ハ
一箇ノ請願タルニ過キス
- 二 嫌疑ノ原因ハ枚擧ス可カラス故ニ忌避ニ付テハ濫訴ノ弊ヲ防ク爲
メ制限アリ回避ニ付テハ忌避ト同一ノ原因其他如何ナル原因クル
ニ拘ハラス會議局ノ判決スル所ニ任ス畢竟裁判官タル者ハ廉耻ノ
心甚シキニ因リ忌避ヲ待タスニテ回避シ此醜惡ナル訴訟ヲ受クル

○忌避ノ原由

- 一 情愛心ノ嫌疑即チ豫審判事ト被告人ト親屬ナルガ又ハ豫審判事ノ配偶者ト被告人若クハ其配偶者ト親屬ナル場合ヲ謂フ豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナルキモ亦同シ仮令原告被告共ニ裁判官ノ親屬ナルモ親屬中親疎アリ黨與アリ決シテ嫌疑ノ原由ヲ減滅セシムルコトヲ得ス
- 二 憎惡心ノ嫌疑即チ豫審判事ト被害者ト親屬ナルガ又ハ豫審判事ノ配偶者ト被害者若クハ其配偶者ト親屬ナル場合ヲ謂フ豫審判事又ハ其配偶者被害者タルキハ固ヨリ言ヲ竣タサルナリ
- 三 利慾心ノ嫌疑即チ豫審判事又ハ其配偶者ニテ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル場合ヲ謂フ

四 固執心ノ嫌疑即チ第四十七條ノ規則ニ背キタル場合ヲ謂フ然レモ

此場合ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ異議ヲ申立テタル上ニテ其言渡ニ對シ故障ヲ爲サル可カラズ何トナレハ忌避ノ原由中ニ明文ナキヲ以テ第二百三十八條以下ノ手續ニ從フコトヲ得サル可シ

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ

但申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

○忌避ノ原由ニ因リ異議ノ申立ヲ爲スノ手續

- 一 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シトアリ通常異議ノ申立ト雖

モ亦其取調ヲ受ク可キ裁判官ニ之ヲ爲サ、ル可カラス

二 忌避ノ申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出シ書記ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致スルハ通常書類ヲ差出ヌノ手續ナリトス然レモ通常異議ノ申立ヲ爲スニハ第一法律ニ明文ナシト雖モ豫審中ハ書面ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲シ書面ヲ以テ言渡ヲ爲ス可シ其申立ヲ爲スニハ書記局ヲ經由シテ趣意書ヲ豫審判事ニ差出ス可シ第二訴訟關係人豫審判事ノ取調ニ立會ヒ其取調ノ手續ニ付キ異議アルキハ直ニ口述ヲ以テ申立ヲ爲シ口述ヲ以テ言渡ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ其申立及ヒ言渡ヲ調書ニ記載ス可シ

三 豫審判事ハ忌避ノ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達スルハ殆ト行政官ニテ願書ニ指令スルノ方法ニ似タリ然レモ一箇ノ判決ナルヲ以テ之ヲ認可シ之ヲ棄却スル

ノ理由ヲ付セサル可カラズ通常異議ノ申立ヲ判決スルニ付テハ明文ナキヲ以テ必スシモ二十四時内ニ限ルヲナカル可シ然レモ急速ヲ要スル處分ヲ除クノ外申立ノ判決ヲ爲シタル上ニテ他ノ處分ヲ爲ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

○忌避ノ判決ニ對スル故障

- 一 忌避ノ判決ニ對スル故障ノ手續ハ通常豫審中ノ故障ノ手續ニ異ナルヲナカル可シ唯豫審判事ヨリ別段忌避ノ申立ヲ棄却シタル辨明書ヲ會議局ニ差出サ、ル可カラズ

二 通常會議局ニ於テ故障ノ判決ヲ爲スニハ趣意書答辯書檢事ノ意見書ニ依ル然ルニ本條第二項ニ答辯書及ヒ意見書ヲ掲載セサルニ因リ豫審判事ヲ以テ對手人トシ且檢事ノ意見ヲ要セサルモノト誤解スルヲ免カレスト雖モ裁判官ハ訴訟關係人ニ非ス訴訟關係人ニ非サレハ上訴ノ中立人又ハ對手人ト爲ル可キニ非ス故ニ忌避ニ付テノ故障ト雖モ其手續ハ通常ノ故障ニ異ナルヲナシ其判決ヲ爲スニ豫審判事ノ辨明書ヲ要スルハ豫審判事ノ身上ニ關スル事件ナルヲ以テ事實ヲ分明ナラシムルノ方法タルニ過キス

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヲ得ス又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スル

ヲ得

○忌避ニ係ル異議又ハ故障ニ因リ豫審手續ノ繼續又ハ停止

一 通常ノ異議又ハ故障ニ付テハ豫審手續ヲ停止スルヲナシ但第二三十五條末項但書ノ場合ノミ豫審處分ノ執行ヲ停止スルヲアリ本條第一項忌避ニ係ル異議又ハ故障ニ付テモ亦豫審手續ヲ繼續ス但異議又ハ故障ノ判決ヲ待タスシテ終結ノ言渡ヲ爲スヲ得サルハ法律ニ明文ナシト雖モ通常ノ異議又ハ故障ニ付テモ亦此規則ヲ適用セサルヲ得ス何トナレハ豫審中ノ故障ノ判決ニ對スル上告ハ第二百三十五條ニ於テ説明シタル如ク終結ノ言渡確定スルマテニ之ヲ申立テサル可カラス假令故障ノ判決ニ付キ其言渡書ノ送達アリタルヨリ上告ノ期限ヲ起算スルヲ得ヘシト爲スモ既ニ豫審終結

ノ言渡確定シタル後ニシテ仍ホ上告ヲ爲スハ頗ル不都合ヲ免カレ
サル可シ

二 忌避ニ係ル異議又ハ故障ニ付テハ其判決アルマテ急速ヲ要スル事
件ヲ除クノ外豫審手續ヲ停止スルコトヲ許セリ然レモ豫審判事ハ自
己ノ心証ニ不服ナル判決ヲ爲ス可キ道理ヲキテ豫審手續ヲ停
止スルハ甚タ稀ナル可シ通常ノ異議又ハ故障ニ付テハ此規則アル
コトナシ蓋シ異議又ハ故障ノ爲メ豫審處分ヲ停止スルコト至テハ証憑
ヲ集取スルニ頗ル妨害アルヲ免カレス

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却
シタル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得但豫審終結ノ言渡アリタ
ル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

○忌避ニ係ル故障ノ判決ニ對スル上告

- 一 忌避ニ係ル故障及ヒ上告ハ總テ異議ヲ申立テタル者コノミ之ヲ爲
スコトヲ許セリ即チ第二百三十九條及ヒ本條ノ法文ヲ以テ判然タリ
法律ハ裁判官ヲ交替スルモ對手人ノ權利ヲ減殺ス可キモノニ非ス
トスルカ又ハ忌避ニ付テハ申立人ノ利益ヲ保護ス可シトスルカ畢
竟對手人ニ故障及ヒ上告ヲ許スモ之ヲ爲スハ甚タ稀ナル可シト雖
モ之ヲ許サ、ルハ其理由アルヲ見サルナリ
- 二 忌避ニ係ル故障ノ判決ニ對スル上告ハ豫審終結ノ言渡アリタル後
ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得サルハ第二百三十六條未項ノ規則ニ同
シ故ニ會議局ノ言渡ハ直ニ執行ス可キハ當然ナリ

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタ
ル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時
ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認

可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サ

シム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又

ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取

調ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關

係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之

ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタ

ル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事

ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

○書記ニ付テノ忌避

一 書記ヲ忌避スルハ調書ヲ作り書類ヲ保存シ書類ヲ送達シ証憑物件

ヲ看護スル等ニ付キ公平ヲ失スルノ嫌疑アル而已ナラス職務上立

會人タルノ性質ヲ有スルヲ以テ之ヲ忌避スルヲ許セリ

二 第二百四十四條ノ文意ニテハ書記ヲ忌避スルハ異議ノ申立ヲ爲サス

シテ直ニ會議局ニ申立ツ可キニ似タリ且其申立ノ法式ヲモ明記セ

サルヲ以テ故障ニ非スシテ申立人一個ノ情願ナルニ似タリ然レモ

同條ハ前數條ヨリノ引續ナルヲ以テ唯書記ヲモ忌避スルヲ得ハ

キ旨ヲ注意シタルニ過キス故ニ通常異議及ヒ故障ノ法式ニ從ヒ忌

避ノ申立ヲ爲ス可キハ言ヲ竣タサルナリ

○檢察官ニ付テハ忌避ヲ爲ス可カラサルノ理由

- 一 檢察官ハ刑事ノ原告人ナリ原告人ハ固ヨリ被告人ニ抗撃ス可キ位
置ニ在ル者トス抗撃者ハ互ニ忌避スルヲ得ヘキノ理ナシ
- 二 訴訟ハ原告被告ヲ以テ成立ツ可キ者トス假令檢察官ヲ除却スルノ
言渡アルモ實際訴訟ヲ進行スルヲ得サル可シ

○回避ノ手續

- 一 回避ハ前ニ述ヘタル如ク情願ナリトス故ニ上訴スルヲ許サス且
訴訟關係人其申立ニ干預スルヲ得ス
- 二 回避ノ申立ハ總テ會議局ニ於テ之ヲ許否シ檢察官ノ意見ヲ聽シ
テ要ス但檢事補ノ回避ハ其長官之ヲ許否ス

○忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル以上ノ手續

- 一 豫審判事又ハ書記ニ付テノ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタルハ

通常ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ其代員ヲ命ス第二百四十三條ニハ
會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時トアリ豫審判事
ニテ忌避ノ申立ヲ認可シタル時モ亦同條ノ規則ニ從フ可キハ當然
ナリ又前豫審判事ノ爲シタル處分ハ更ニ其取調ヲ爲スヲ得ヘキ
トナ同條ニ掲載セリ前書記ノ爲シタル事件ト雖モ嫌疑アルハ亦
之ヲ更改スルヲ得ヘシ

- 二 檢事ノ回避ヲ認可シタルハ檢事ノ指名スルヲ要セス官等ノ順序
ニ從ヒ檢事補之ニ代リ檢事補ノ回避ヲ認可シタルハ檢事自ラ之
ニ代リ又ハ他ノ檢事補ヲシテ之ニ代ラシム可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障

ヲ爲スヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終

結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ
得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ
テハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判
所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス

○豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キ人及ヒ故障ヲ爲
ス可キ場合ニ付テノ制限

- 一 檢事ハ第三十五條ニ於テ說明シタル如ク其職務ニ於テ刑事ノ原告
人及ヒ裁判ノ監察人タルニ箇ノ性質ヲ有ス故ニ刑事ノ原告人トシ
テハ被告人ノ利益ナル言渡ニ對シテ上訴ヲ爲シ裁判ノ監察人トシ
テハ被告人ノ不利益ナル言渡ニ對シテ上訴ヲ爲スヲ得即チ本條第
一項總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ許ス所以ナリ

二 民事原告人ハ豫審ノ關係甚々薄シ何トナシハ豫審ニ於テハ賠償返
還ノ取調ヲ必要トセサルヲ以テ終結ノ言渡ノ如何ニ拘ハラズ私訴ニ
付キ越權ノ處分アリタル場合ノミ故障ヲ爲スヲ許ス民事擔當人
ノ如キ未ダ豫審ニ於テ眞ノ訴訟關係人ト看做ス可カラズ故ニ上訴
ヲ許サルハ言ヲ誤ラサルナリ

三 被告人ハ自己ノ爲メ不利益ナル場合ニ非サレハ豫審終結ノ言渡ニ
對シ故障ヲ爲スヲ許サス且不利益ナル場合ト雖モ輕罪裁判所又
ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ更ニ制限アリ第一言渡ヲ
爲シタル豫審判事ノ管轄違ナル時又ハ送付セラル可キ
輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ノ相當ナラサル時ノミ故障ヲ爲スヲ
許セリ

○豫審中ノ故障ト終結ノ言渡ニ對スル故障ト重要ナル差

異

一 故障ヲ爲ス可キ理由ノ差異但豫審中ノ故障ハ法律ニ於テ爲ス可カラサル處分ヲ爲シタルト爲ス可キ處分ヲ爲サ、ルニ限ル即チ第二百三十四條第一第二第三ニ定メタル場合其他越權ノ處分アリタルヲ以テ故障ノ理由トス故ニ豫審ノ處分規則ニ背キタルヲ無キハ事實ノ錯誤ヲ理由トシテ故障ヲ爲スヲ得ス終結ノ言渡ニ對スル故障ハ檢事ニ付テハ其言渡ノ如何ニ拘ハラズ法律ノ錯誤ノミナラズ事實ノ錯誤ヲ以テ故障ノ理由ト爲スヲ許セリ譬へハ豫審判事ハ證據充分ナラサル者トシテ免訴ノ言渡アルモ檢事ハ證據充分ナルニ因リ送付ノ言渡ヲ爲ス可キ者トシテ故障ヲ爲スヲ得ヘシ被告人ニ付テモ重罪裁判所ニ送付スルノ言渡アリタルハ事實ノ錯誤ト雖モ故障ノ理由ト爲スヲ許セリ

二 故障ヲ爲ス可キ期限ノ差異但豫審中ノ故障ハ時日ノ長短ニ拘ハラズ終結ノ言渡アルマテ其申立ヲ爲スヲ得終結ノ言渡ニ對スル故障ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ一日内ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ
故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

○豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ノ手續

- 一 終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スニハ其言渡書ヲ受取リタル日ヨリ一日内ニ申立書ヲ書記局ニ差出シ三日内ニ趣意書ヲ同局ニ差出ス可シ若シ一日内ニ申立書ヲ差出ス者ナキハ其言渡確定ス申立書ヲ差出シタリト雖モ三日内ニ趣意書ヲ差出サ、ルキハ亦其言渡確定ス可シ
- 二 書記局ニ於テ故障ノ申立書ヲ受取リタル日ヨリ其申立アリタル日ヲ對手人ニ通知ス可シ其通知ヲ爲スハ答辨ノ豫備ヲ爲サシムルニ非スニテ終結ノ言渡未タ確定セサルコトヲ注意スルコト止ルヲ以テ對手人其通知ヲ受ケスト雖モ別段異議ヲ申立ルヲ要セス但趣意書ノ送達ヲ受ケサル場合ハ此限ニ在ラス
- 三 趣意書ヲ差出シタル以上ノ手續ハ第三百三十五條ニ於テ説明シタル豫審中ノ故障ノ手續ニ同シ

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコトヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

○附帶ノ故障

- 一 附帶ノ故障トハ通常ノ故障アリタル場合ニ於テ其故障ニ附帶シテ別段ナル條件ニ付テ更ニ對手人ヨリ申立ルコトヲ許シタル故障ヲ謂フ即チ通常ノ故障ヲ以テ主タル故障トシ之ニ對スル故障ノ名稱ナリトス
- 二 附帶ノ故障ヲ許スハ其申立人及ヒ對手人ノ利益ヲ平均ナラシムルニ在リ何トナジハ原告被告ニ拘ハラズ些細ナル條件ニ付テハ上訴ヲ爲スノ手數ニ相當ナル効驗ヲキチ以テ不當ナル言渡ト雖モ之ヲ

甘受スルコトナシトモ然レモ彼者ヨリ不服ヲ申立ルモ此者ヨリモ亦不服ヲ申立テサルヲ得ス控訴上告ニ付テモ亦同シ

○附帯ノ故障手續

- 一 附帯ノ故障ハ主タル故障ニ付キ言渡書ノ送達アラサル以前ニ之ヲ爲サ、ル可カラズ否サレハ附帯ノ名稱ニ背クモノトス
- 二 附帯ノ故障ヲ爲スコトハ申立書ヲ差出スコトヲ要セス直ニ趣意書ヲ差出ス可シ
- 三 附帯ノ故障アリタルモ書記ヨリ其旨ヲ會議局ニモ通知セサル可カラズ會議局ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ附帯ノ故障ニ付キ趣意書答辨書及ヒ檢事ノ意見書等送致アルマテ主タル故障ノ判決ヲ停止ス可シ

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

○豫審終結ノ言渡ノ執行

- 一 故障ナキモハ第二百四十七條ニ定メタル期限ノ經過スルヲ待テ終結ノ言渡ヲ執行ス故ニ訴訟關係人ニ終結ノ言渡書ヲ送達スルハ必ス同日ナルヲ要ス否サレハ被告人ニ付テハ既ニ言渡確定シタルヲ以テ之ヲ執行シ民事原告人ニ付テハ未タ言渡確定セサルヲ以テ故障ヲ爲ス等ノ抵觸アルヲ免カレヌ
- 二 故障アリタルモハ被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ヲ除クノ外會議局ノ判決アルヲ待テ終結ノ言渡ヲ執行ス若シ私訴ニ付キ故障アリタル時公訴ト雖モ被告人ヨリ故障アリタル時又ハ檢事ヨリ故障アリト雖モ被告人ノ勾留ヲ要ス可キ趣意ニ係ラサ

ル時ハ本條ニ明文ナキニ拘ハラズ被告人ヲ釋放スルノ言渡ハ故障
ノ判決ヲ待タズ直ニ之ヲ執行スルコトヲ得ヘシ

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類
ヲ會議局ニ差出ス可シ

○故障書類ヲ會議局ニ差出スノ手續

一 書記局ニ於テ故障ノ趣意書及ヒ答辨書ヲ受取リタル時ハ訴訟書類

ト共ニ之ヲ檢事ニ送致シ檢事ヨリ意見書ヲ添ヘ會議局ノ判決ニ付
スルハ第二百三十五條第二百三十六條ニ於テ説明シタル手續ト異
ナルコトナシ書記ハ唯書類往復ノ取扱ヲ爲スニ過キス

二 本條ニ故障ノ趣意書答辨書トアリテ檢事ノ意見書ヲ記載セカルハ
脱文ナリ之ヲ訴訟書類トアルニ包含シタルモノト解スルモ穩當ナ
ラサルヲ覺フ時ハ之ヲ檢事ニ送致スルコトヲ要ス

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則

ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其
全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ
爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ
得

○豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ノ判決

- 一 終結ノ言渡ニ對スル故障ヲ判決スルノ方法ハ第二百三十六條ノ規
則ニ從フ即チ第一會議局ニ於テ判事三名以上ノ取調ヲ要スルコト第
二趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス
可キコトヲ謂フ

二 終結ノ言渡ノ全部ヲ取消シタル場合ノミナラス其幾分ヲ取消シタル場合ト雖モ更ニ其全部ニ付キ言渡ヲ爲スハ第一故障ニ付テハ事實ノ取調ヲモ爲スニ因リ不法ナル影響ヲ更改スルコトニ最モ注意セシムル爲メナリ第二終結ノ言渡ト會議局ノ言渡ト牴觸セシメサル爲メナリ

三 被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルハ終結ノ言渡ヲ取消スト否トニ拘ハラス故障ノ判決アルマテ何時ニテモ其言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事

一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

○會議局ニ於テ更ニ爲ス可キ豫審

一 故障ハ書類裁判ナルヲ以テ會議局ニ於テハ直接ニ豫審ヲ行フコト

カル可シ若シ直接ナル取調ヲ要スルキハ別段判事一名ヲシテ之ヲ爲サシム

二 豫審ノ全部ト幾分トニ拘ハラス更ニ取調ヲ爲スモ亦通常豫審ノ規則ニ從ハサル可カラス故ニ法律ニ於テ檢事ノ異見ヲ要スル事件ニ付テハ之ヲ聽カサル可カラス檢事モ亦公訴ヲ實行スル爲メ臨時ノ請求及ヒ終結ノ請求ヲ爲スコトヲ得

三 直接ナル取調ヲ爲シタル判事ハ豫審ノ全部ニ付キ更ニ取調ヲ爲シタル場合ト雖モ自ラ終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス何トナレハ會議局ニ於テハ自ラ故障ヲ判決スルノ資料ニ供スル爲メ更ニ豫審ヲ爲サシムル所以ニシテ其判事ヲ直ニ判決ヲ爲サシムル所以ニ非ス故ニ直接ナル取調ヲ爲シタル上ニテ報告書ヲ差出サシム然レモ會議局ニ於テハ必スシモ報告書ニ從テ判決スルヲ要セス

○更ニ豫審ヲ爲ス可キ判事

○更 更豫審ヲ爲ス可キ判事ハ故障ノ判決ヲ爲ス可キ判事中ヨリ之ヲ撰任ス可キカ又ハ他ノ判事中ヨリ之ヲ撰任ス可キカ頗ル疑惑ヲ免カレサル可シ然レモ本條ニハ會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ云々トアリ即チ會議局ヨリ之ヲ命スルノ文意ナリ第二百五十五條第一項ニ於テモ亦同シ若シ他ノ判事中ヨリ之ヲ撰任ス可キハ裁判所長ヨリ之ヲ命セサルヲ得ス且會議局ニ於テモ書類ニテ不充分ナルニ因リ更ニ直接ナル取調ヲ爲サシムル所以ナレハ實際會議局ノ判事中ヨリ抽籤又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ撰任スルヲ最モ適當ナル可シ

二 大審院ニ於テ上告事件ニ付キ命ス可キ專任判事ハ其判決ニ干預セシメス何トナレハ上告ニ付キ專任判事ヲ要スルハ公判ノ主義ヲ遵奉ス可キ爲メナリ若シ專任判事ヲ用ヒサルハ上告ノ趣意及ヒ答辨ハ書類ニ依ラカレハ之ヲ詳悉スルヲ得サル可シ然ルニ原告

被告ニ代テ其申立ヲ陳述シタル者ニシテ其判決ニ干預スルハ前ニハ訴訟關係人ノ位置ニシテ後ニハ裁判官ノ位置ナリ前後顛倒頗ル嫌疑ス可キヲタルヲ免カレヌ故ニ大審院ニ於テ命ス可キ專任判事ト本條及ヒ第二百五十五條ニ於テ撰任ス可キ判事ト同視スルヲ得ス

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヲ得

○故障ノ取調中新ニ不當ナル處分ヲ發見シタルニ付テノ處分

一 會議局ニ於テハ第一豫審判事爲ス可カラサル處分ヲ爲シタル時第二其爲ス可キ處分ヲ爲サ、ル時第三其處分ノ不明不完ナル時第四其

發見セサル事實ヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ更ニ取調ヲ爲ス而已
ナラス其取調ノ結果ニ因リ終結ノ言渡ヲ取消スヲスル可シ即チ前
條ハ更ニ取調ヲ爲スノ手續ヲ定メ本條ハ言渡ヲ取消ス可キ理由ヲ
定メタルモノトス

二 前ニ述ヘタル四箇ノ場合ハ會議局ニ於テ更ニ取調ヲ爲スノ理由ト
スルモ毫モ妨碍アルコトナシ何トナレハ前條ニハ會議局ニ於テ必要
ナリトスル時云々トアリテ更ニ取調ヲ爲スノ理由ヲ定ムルコトナシ
然レモ會議局ノ職權ヲ以テ終結ノ言渡ヲ取消スニ付テハ本條ニ三
箇ノ理由ヲ規定セリ故ニ前ニ述ヘタル四箇ノ場合ニ付キ更ニ取調
ヲ爲スモ三箇ノ理由中ニ包含シ難キコトナキニ非ス即チ免訴ノ言渡
ニ對シ故障アリタル場合ニ於テ會議局ニテ其事件ヲ管轄違又ハ送
付ノ言渡ヲ爲ス可キモノト思料シタルモ本條ニ定メタル理由ニ
當ラサルヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス其能ハサル可シ蓋シ立法

官ハ被告人保護ノ主義ニ基キ公訴受理ス可キコトニ付テハ會議局ノ
職權ヲ以テ豫審判事言ノ渡ヲ取消スコトヲ許サ、ルモノカ決シテ然
ラサル可シ何トナレハ第二百六十一條ニ依ルキハ免訴ノ言渡確定
シタル事件ト雖モ新ナル証憑アルキハ會議局ニテ再ヒ其起訴ヲ爲
サシムルコトヲ得ヘシ況ヤ故障ノ取調中ニシテ未タ確定セサル言渡
ノ取消ヲ爲スコトヲ得サルノ理アラシヤ故ニ法文ニ拘泥スルキハ少
シク穩當ノ釋義ニ非スト雖モ受理ス可カラサル事件ヲ受理シタル
ト受理ス可キ事件ヲ受理セサルト共ニ公訴受理ス可カラサルノ原
由中ニ包含シタルモノカ將タ立法官公訴受理ス可キコトノ理由ヲ脱
漏シタルモノカ予ハ法文ノ不備ナルヲ谷ムルコトヲ好マス實際ニ於
テハ免訴ノ言渡ト雖モ會議局ニ於テ他ノ言渡ヲ爲ス可キモノナル
コトヲ發見シタルキハ必ス其言渡ヲ取消サ、ルヲ得サルコトヲ信スル
ナリ

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

○故障ノ取調中共犯罪又ハ附帶ノ犯罪ニ付キ新ニ被告人ヲ發見シタルニ付テノ處分

一 本條第一項共犯ニ付テハ起訴ヲ受ケサル者トシ附帶ノ犯罪ニ付テ

ハ豫審ヲ受ケサル者トシタルハ何等ノ理由アルカ予ハ之ヲ解スル能ハス若シ附帶ノ犯罪ハ法律上檢察官ノ起訴ヲ待タスシテ受理スルヲ得ヘキニ因リ豫審ヲ受ケサル者トシタリトセシカ共犯罪ハ法律上同一ノ事件ト看做スヲ以テ別段起訴ヲ待タスシテ之ヲ受理ス可キヲ定ムルヲ要セサル者トス殊ニ起訴ヲ受ケサル者トシタルノ穩當ナラサルヲ覺フ且起訴及ヒ豫審ノ處分ハ被告人ヲ發見セスト雖モ之ヲ爲スヲ得ヘキニ因リ未タ發見セサル被告人ト雖モ亦既ニ其處分ヲ受ケタル者ト看做スヲ得故ニ第十四條ニ於テハ未タ發見セサル被告人ニ付テモ亦期滿免除ノ期限ヲ中斷ス可キヲ規定セリ蓋シ本條第一項ハ會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯罪又ハ附帶ノ犯罪ニ付キ新ニ被告人ヲ發見シタル時ハ云々ノ文意ニ改正スルヲ以テ予説ニ適スルモノトス

二 會議局ノ取調ハ事實ノ覆審ナルニ因リ前條及ヒ本條ニ定メタル職

權ヲ有スルハ適當ナル可シ若シ此職權ナキハ其局ノ取調上ニ困難ヲ生スル而已ナラズ公判ニ於テモ亦困難ヲ生スルコトアル可シ
二 判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ報告書ヲ差出サシムルノ手續ハ總テ第二百五十三條ニ於テ解説スル所ニ同シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書

ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

○故障ニ付テノ言渡書ノ送達

- 一 故障ノ取調ハ事實ニ干渉スルヲ以テ仍ホ豫審ノ主義ニ基キ之ヲ密行メ故ニ言渡ヲ爲スニハ豫審判事ノ言渡ト同シク言渡書ヲ送達スルニ止ル
- 二 本條ニハ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シトアリ畢竟公訴ニ付テノ故障ナルキハ檢事及ヒ被告人ニ送達シ私

- 二 訴ニ付テノ故障ナルキハ民事原告人及ヒ被告人ニ送達スルヲ以テ足レリトス然レモ檢事ハ私訴ニ付テノ故障ト雖モ意見書ヲ差出シ且言渡ノ確定スルヲ待テ公判ニ付スルノ手續ヲ爲サ、ル可カラス故ニ豫審ニ於テハ私訴ノ故障ノミニ關スル會議局ノ言渡ト雖モ其言渡書ヲ檢事ニ送致セサル可カラス
- 三 故障ニ付テノ言渡書ノ送達アリタルキハ其送達アリタルヨリ三日内ニ上告ヲ申立テ爲スコトヲ得第二百五十七條ニハ訴訟關係人誰ニテモ上告ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ規定セリ然レモ故障ノ關係人ニ非サレハ上告ヲ爲スコトヲ許ス可キノ理ナカル可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ

對シ上告ヲ爲スコトヲ得

○本條ハ故障ノ判決ニ對シ上告スルヲ得ヘキコトヲ注意シ

タル迄ニテ別段説明ヲ要セス

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡

ニ對シ上訴スルヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其

記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被

告人上訴ノ權ヲ失フヲナカル可シ

○被告人ニ送達ス可キ言渡書ニ上訴スルヲ得ヘキヲ及ヒ

其期限ヲ記載スルノ理由

一 法律ハ頒行ノ日ヨリ我國法ノ管轄ニ屬スル者ナルキハ文字ヲ知ラ

ズ國語ニ通セサル等ニ拘ハラズ一般ニ之ヲ熟知シタルモノト看做

セリ然ルニ既ニ法律ニ明示シタル上訴ノ權利及ヒ其期限ヲ言渡書

ニ記載スルハ單ニ被告人保護ノ規則タルニ外ナラサルナリ

二 法律ハ頒行ノ日ヨリ何人ニ限ラス之熟知シタルモノト看做サ、レ

ハ政令何時カ行ハレシ是非曲直何ニ因テ糾サシ善惡邪正何ニ因テ

定マラシ畢竟已ムヲ得サルノ原則ナリトス然レモ己ムヲ得サルノ

原則ハ己ムヲ得サルニ非サル場合ニ適用スルヲ要セス故ニ上訴

ノ權利及ヒ其期限ヲ豫メ被告人ニ詳知セシムルハ法律ノ注意最モ

至シルモノト謂フ可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ

規則ハ豫審ノ上訴ニテモ亦之ヲ適用ス

○本條ノ解釋ハ第三百十一條第三百十二條第三百十三條

ニ讓ル

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ

檢事其言渡書ニ一切ヲ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所

檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ
重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ
檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

○重罪裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ執行スルニ付テノ手續

- 一 重罪裁判所ニ送付スルノ言渡確定シタルト雖モ第二百二十七條第一項ニ定メタル言渡ニ基キ被告人ヲ直ニ重罪裁判所ニ送致スルコトナシ何トナレハ重罪裁判所ヲ開クハ定期アルヲ以テ速ニ被告人ヲ送致スルモ速ニ裁判アルニ非ス故ニ護送ノ費用ト手数トヲ節減スル爲メ定期前檢事長ノ指揮アルヲ待テ各重罪事件ノ被告人ヲ同時ニ送致ス可シ然レモ確定シタル言渡書ハ速ニ之ヲ檢事長ニ送致セサル可カラズ何トナレハ檢事長ハ第三百七十三條ニ從ヒ訴訟書類

ニ因リ豫メ公訴狀ヲ作テサル可カラズ且重罪事件ノ都合ニ因リ第七十一條ニ從ヒ臨時開廳ノ手續ヲ爲サ、ル可カラズ即チ本條第一項ノ手續ヲ缺ク可カラサル所以ナリ

- 二 檢事長ハ重罪裁判所ノ開廳前總テ重罪ノ被告人及ヒ證據物件ヲ重罪裁判所ニ送致ス可キコトヲ輕罪裁判所檢事ニ命ス可シ本條第二項ニ一切ノ書類トアレモ書類ハ既ニ檢事長ニ送致シタルヲ以テ檢事長ヨリ直ニ重罪裁判所檢察官ニ之ヲ送致ス可シ必スシモ檢事長ヨリ一應之ヲ還付シ更ニ被告人ト共ニ之ヲ送致セシムルヲ要セス
- 三 重罪裁判所ヨリ以外ノ裁判所ニ送付スルノ言渡ノミナラス總テ終結ノ言渡確定シタルキハ檢事其執行ヲ爲ス可キハ言ヲ埃タス第三項ハ舊草案ニ於テハ必要ナリト雖モ此治罪法ニ於テハ本條ニ必要ナル規則ニ非ス

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其

言渡確定シタル時、罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス
新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

○再訴ヲ許サ、ルノ理由

- 一 再訴ヲ許サ、ルハ確定裁判ヲ設ケタルノ理由ト異ナルコトナシ何トシテ再訴ヲ許サ、ルハ裁判確定ノ効ナカル可シ
- 二 同一ノ事件ニ付キ罪名ノ變更ハ裁判官ノ受理不受理ニ關係スルコトナシ故ニ再訴ノ理由ト爲テ可カラズ譬ハ檢察官ハ謀殺事件トシテ訴ヲ起スモ裁判官ハ故殺トシテ言渡ヲ爲スコト得ヘクシムホリ

○豫審免訴ノ言渡ニ付キ再訴ヲ許シタルノ理由

- 一 本條ノ法文ノミニ着眼スルハ再訴ヲ許サ、ルノ原則ハ被告人ノ利益ノ爲メノミニ設ケタルモノ、ノ如シ然レモ再審ノ訴及ヒ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ除クノ外單リ免訴ノ言渡ノミナラス如何ナル言渡ト雖モ再訴ヲ許スコトナカル可シ若シ再訴ヲ許サ、ルハ被告人ノ利益ノ爲メナリトセハ有罪ノ確定裁判モ亦被告人ノ利益ノ爲メトセサル可カラズ立法官ノ本旨ハ第一項ノ但書ニ在リ若シ但書ナキハ此項ナシト雖モ確定裁判ノ主義ニ基キ決シテ再訴ヲ許スノ理ナキコト因リ本條ノ規則アルヲ要セサルナリ
- 二 公判ニ於テハ有罪ノ確定裁判ニ付キ被告人ノ利益ノ爲メ再訴ヲ許セリ再審ノ訴是ナリ
- 三 豫審ニ於テハ免訴ノ言渡ニ付キ社會ノ利益ノ爲メ再訴ヲ許セリ新ナル證據アリタル場合是ナリ蓋シ新ナル證據アリト雖モ容易ニ再訴

ヲ許ス可キニ非ス故ニ會議局ノ判決アルヲ要ス其判決ヲ爲スニ付
テノ手續ハ總テ故障ヲ判決スルノ手續ニ同シ

治罪法講義第三篇終

明治十三年九月二日版權免許
同十四年三月出版

定價金壹圓廿錢

大分縣平民

橫田國臣

東京麹町區元園町
一丁目七番地

大分縣平民

高瀬四

東京麹町區飯田町
四丁目十六番地



筆記
兼出版人

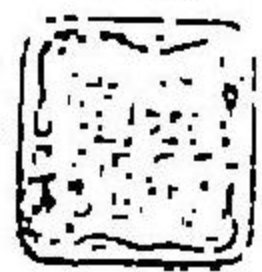
發兌

原亮三郎

東京日本橋區本町
三丁目十七番地

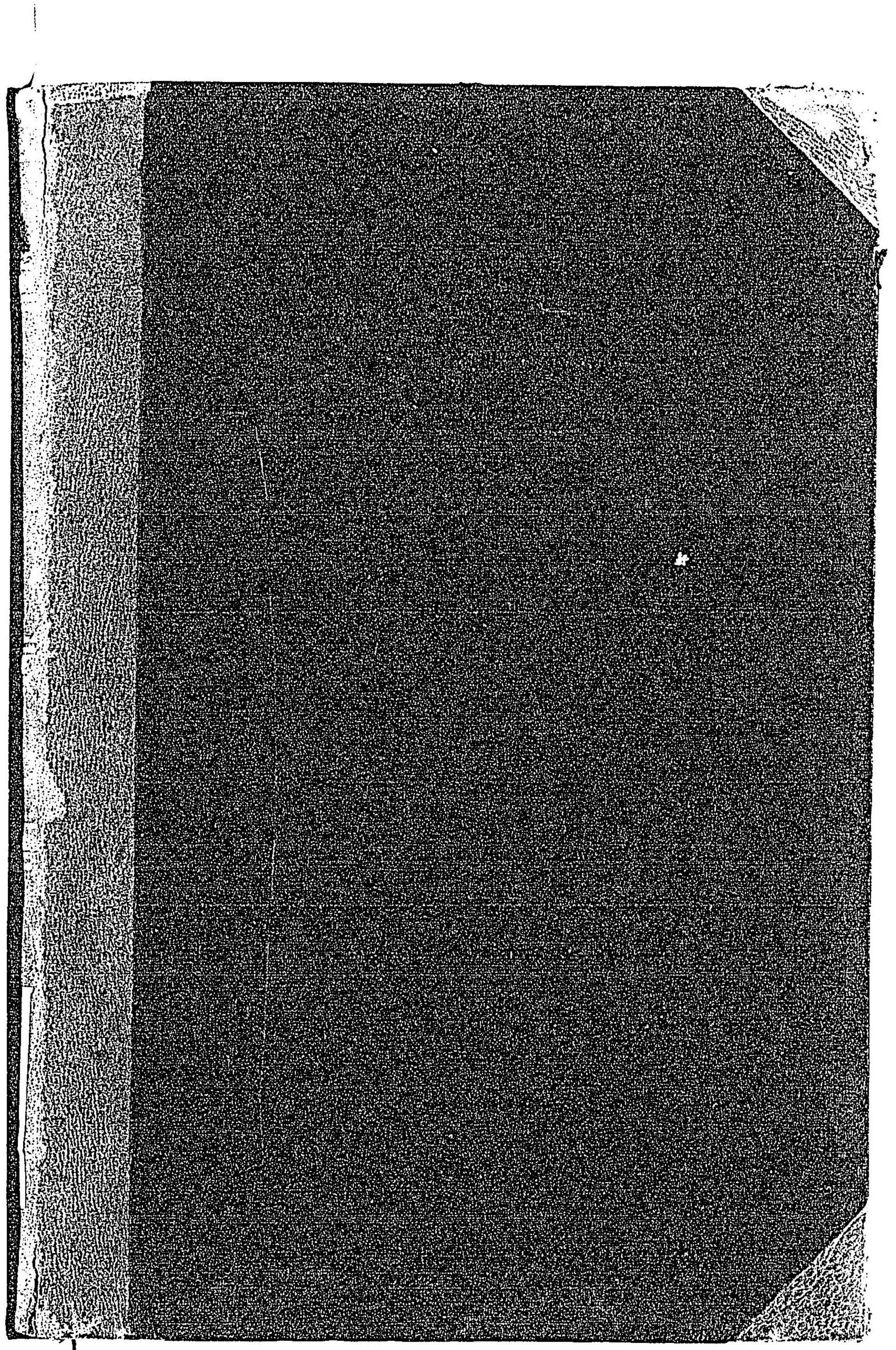
賣捌人

金港堂



大坂
神戶
上州
同高崎

29.10.29
調查立法考查局



036900-001-3

327.6-Y714c

治罪法講義

横田 国臣/述

M14-16

BBS-0406



